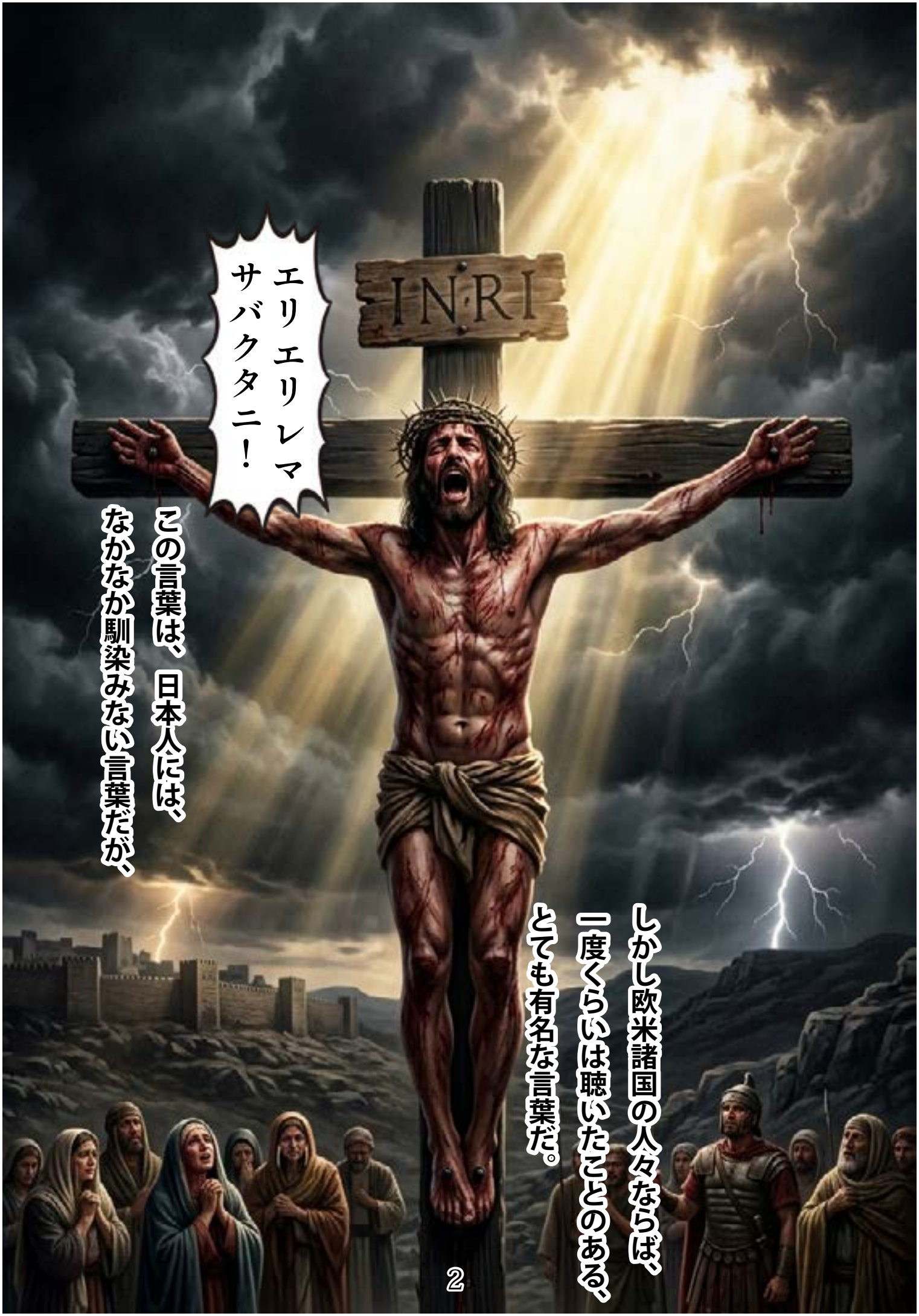
EP.
10
世界卍リベンジャーズ
与国 秀真
YOKUNI Hotsuma



この言葉は、日本人には、なかなか馴染みない言葉だが、

しかし欧米諸国の人々ならば、一度くらいは聴いたことのある、とても有名な言葉だ。

「エリエリレマサバクタニ」
これはキリスト教のイエスが、
十字架の上から
叫んだと言われる言葉であり、

その意味は、
「我が神、我が神、
なぜ私をお見捨てになったのですか」
ということである。

しかし『新約聖書』では、
このイエスの言葉を聴いた人々が、
「あれはエリヤを呼んでいるのだ」
という感想をもらしている。

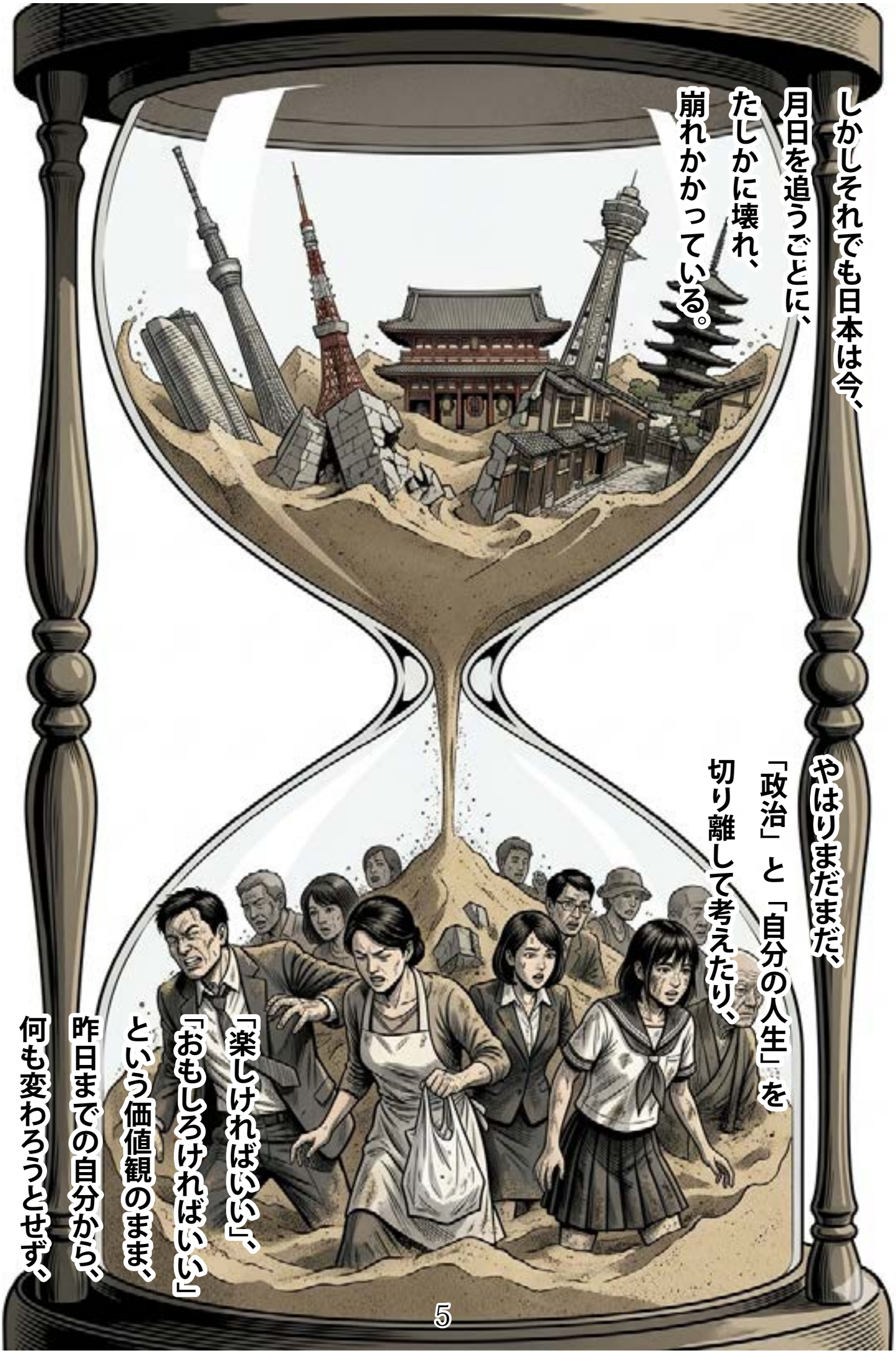
つまりイエスが、
自分が死んで地上を去る時が来たので、
預言者エリヤを呼んでいたのだという。

さて、本漫画も、ついに「エピソードX（テン）」となった。

今回のエピソードの内容は、「日本の問題の本質をついている」と言っても過言ではない。

日本では今、多くの人が政治の問題について、声を上げて、そして立ち上がっている。

「過剰な移民政策問題」、「増税問題」、「汚職問題」など、実際に日本には問題が山積みだ。


しかしそれでも日本は今、
月日を追うごとに、
たしかに壊れ、
崩れかかっている。
やはりまだまだ、
「政治」と「自分の人生」を
切り離して考えたり、
「楽しければいい」、
「おもしろければいい」
という価値観のまま、
昨日までの自分から、
何も変わろうとせず、

崩れていく日本を
感じながら、
知りながらも、
ただ傍観している人も
たくさんいる。

その問題は結局、「心」だ。

「人が心の生き物である以上、
もしも日本が滅びるならば、
日本人の心が日本を滅ぼした」
と、そのように言えるだろう。

しかし「心」というものは、
より素晴らしくもなれば、
みすぼらしくもなるものだ。

心というものは、
たしかに素晴らしく変化し、
優しく利他的になれる、
それを「成長」という。

逆に、心というものは、
みすぼらしく変化もし、
自己中心的で傲慢にもなれる、
それを「堕落」という。

それは結局、
日本人の心が進歩、成長すれば、
日本は、
さらなる繁栄と平和な時代を迎え、

日本人の心が
停滞、もしくは堕落すれば、
日本は必ず滅びにいたる
そのように言えるだろう。

では、
人の心を成長させるものとは、
果たして何であるのか？

その本質的な問に答えるのが、
この「エピソードX（テン）」である。

これまでこの漫画は、
エピソード9まで描き続け、
その中で、
「世界には悪魔崇拝者がいる」

彼らは、
世界の金融システムを支配し、
我々日本人を貧しくして、

「グレート・リセット」による、
「New World Order」
を構築しつつある、

「そしてその悪魔教徒たちは、
ユダヤ人を自称している」

「しかもユダヤ人たちは、
古代よりバアル信仰という
悪魔教に傾いてきた」
ということを述べてきた。

そして、
☞この動画をご覧になれば
ご理解いただけるが、

動画はコチラ☞

今もユダヤ人の素振りをしながら、
バアル信仰が続いていることが、
明確に明らかになった。

では、
悪魔および悪魔教徒の戦略とは、
果たしていかなるものか？

それは本漫画で、
何度も登場している史上最悪の偽書、
『シオンの議定書』を紐解くと、
割と簡単に読み解くことができる。

なぜならこの書物は、
主語を「ユダヤ人」から、
「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」
と置き換えることで、
悪魔の戦略を見破る書物となるからだ。

すでにエピソード8で紹介しているが、
改めてその一部をご紹介したい。

【第十三の議定】
ゴイム（家畜）に事情をさとらせない
ために、我々はマスコミ、
さらにマス・レジャー（大衆娯楽）を
盛んにする。

画像は19世紀末から20世紀に
人気を博した「ヴォードヴィル」

やがて我々の新聞で芸能、

スポーツがもてはやされ、

クイズも現われるだろう。

これらの娯楽は、
我々と政治闘争しなければならない
人民の関心を、
すっかり方向転換させてしまう。

すべて我々の考える通りにしか
考えられないようになる。

「進歩」という錯覚をゴイムに与え、
真理は唯一ひとつあるだけで、
この世に進歩の余地などないことを
決して気づかさせないようにする。

それはつまり
悪魔教徒どもは、
芸能やスポーツ、クイズなどの娯楽に
我々の意識（心）を向けさせて、
深く考える能力を奪い取り、
「進歩」という錯覚の中で、
真理に気づかせないようにする、
と述べているのだ。

さらに『13の議定』の中には、
このような言葉もある。

神の選民であり、
真理の保管人である我々の外(ほか)には
何びとも知らない真理を覆い隠す・・・。

すなわち悪魔教徒たちは、
「真理を覆い隠す」ということを
戦略の重点に置いているのだ。

では、**真理**とは果たして何か？

水が雨として降り注ぎ、
その雨水が川を下って大海に流れ、

太陽がその大海原を照らして
蒸発し、やがて雲となり、
その雲がまた雨となる・・・、

水が絶えず循環しているように、
この世界には
確かに「法則」が存在している。

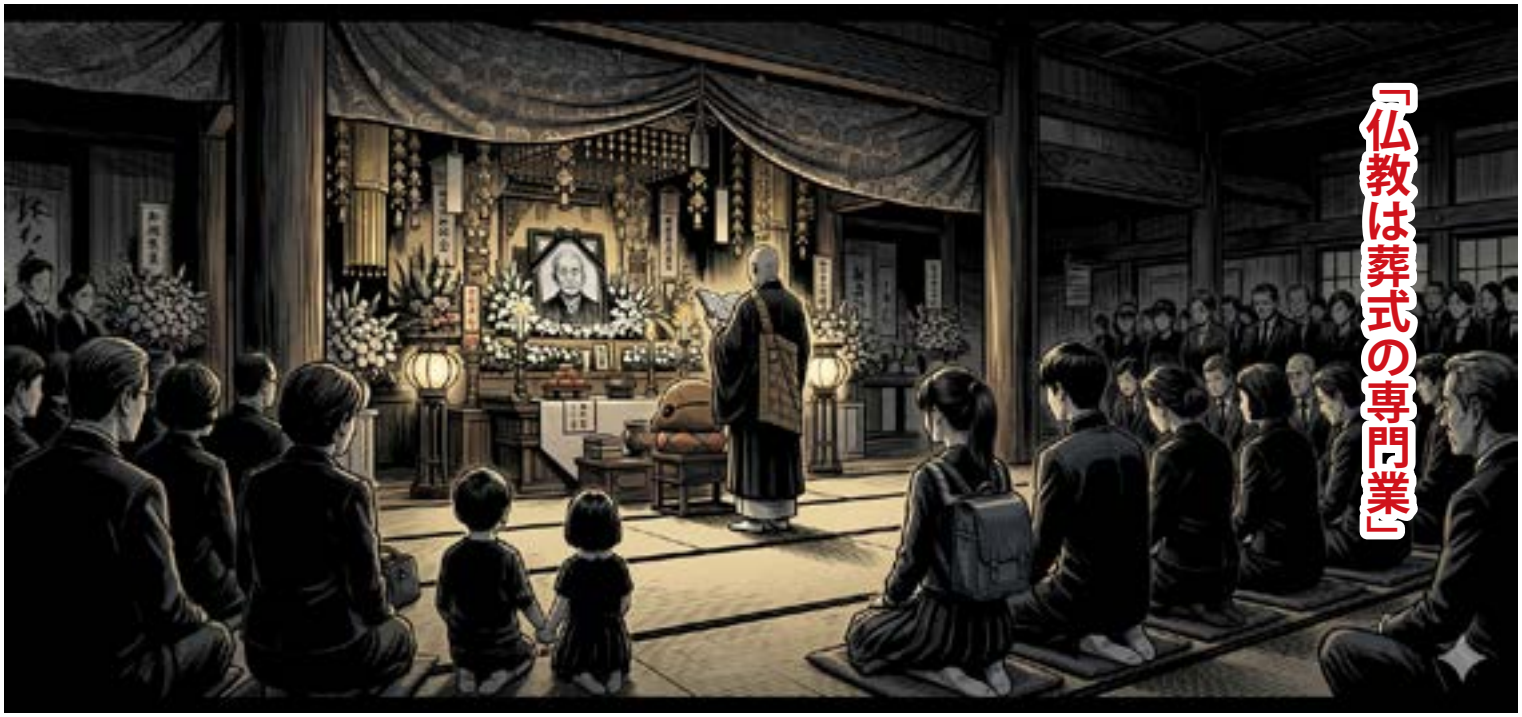
「真理」の「真」は、
「真実」を意味し、
「理」は「法則」を意味するように、
真理とは
「真実の法則」である。

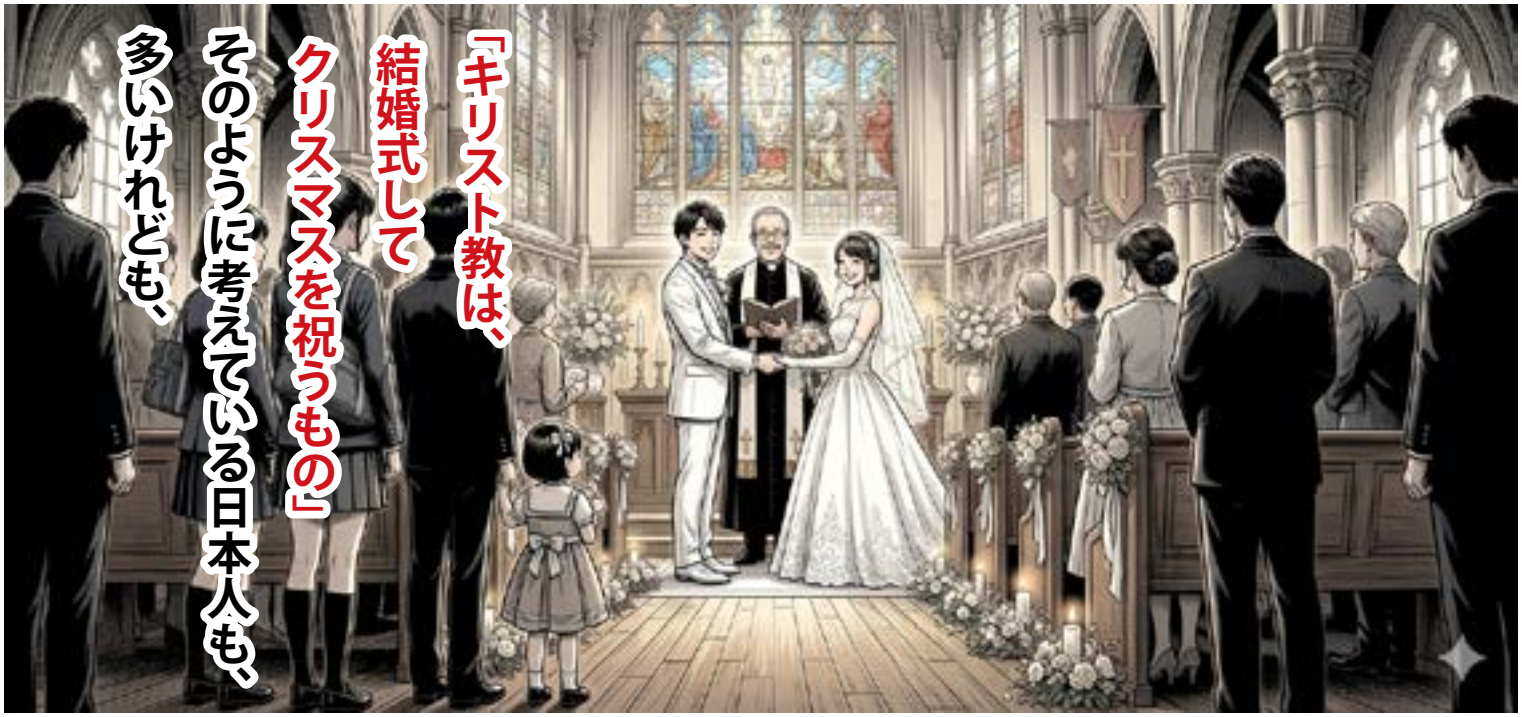
種が土から芽吹いて、
大木となり、
青々とした葉を咲かせて、
風が吹いて木の葉が地に落ち、
数百年の年月を経て
やがて朽ちていくのも、
その背後には、
真理が存在している。

地球が、こうしている今も、
時速10万8000キロという高速度で、
太陽の周りを
365日5時間48分46秒かけて、
一週しているのも、
その背後には、
真理が存在している。

その太陽系そのものが、
秒速約220～240キロという超高速で、
天の川銀河の中を、
約2億5000万年かけて、
一週しているのも、
その背後には、
真理が存在している。

そうした広大な銀河が、
観測可能な宇宙だけでも、
約2兆個も存在し、
こうしている今現在も、
宇宙が調和を保ちながら、
進歩・拡大を続けているのも、
やはりその背後には、
永遠に変わることのない
「真実の法則」が存在している。


『仏教は葬式の専門業』


「キリスト教は、
結婚式して
クリスマスを祝うもの」
そのように考えている日本人も、
多いけれども、

実は仏陀が伝えてきたことも、
イエスが伝えたことも、
「真理」だった。

エピソード5で紹介したが、
ここで改めて、
お釈迦様が説かれた真理を、
紹介したい。

生きとし生けるもの、
すべてが尊い。

すべての生き物が、
魂修行をしながら、

仏へと近づいている、
「仏性」を持った
尊い存在なのである。

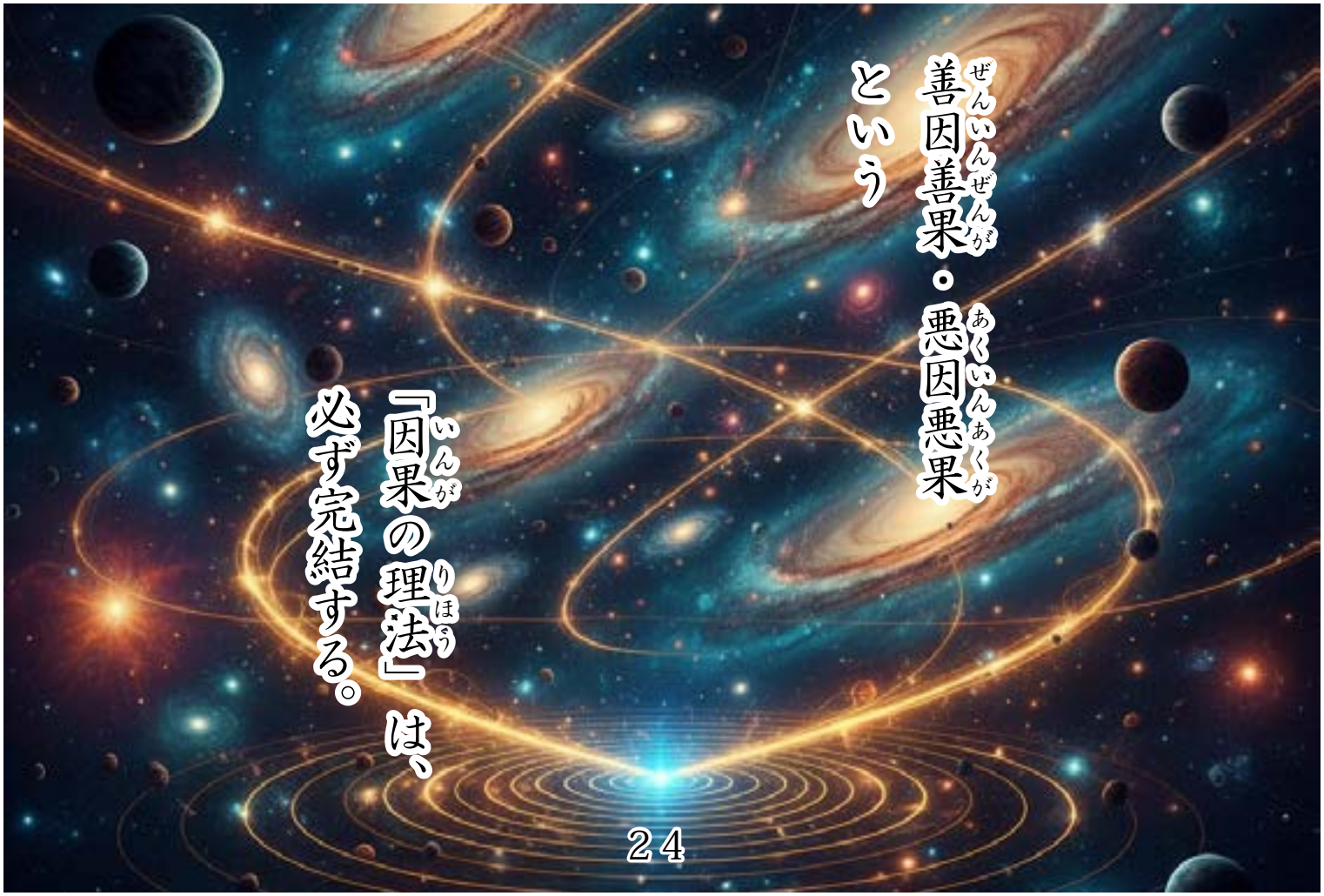
だから人生には
必ず四苦八苦が訪れるが、

苦しみや悲しみは
魂を磨くための
砥石に過ぎない。

この世の生命を終えた後にも、
命は続き、

厳然として、
『天国と地獄』は存在する。

『転生輪廻』という
生まれ変わりを繰り返し、
その転生の中において、



善因善果・悪因悪果
という
『因果の理法』は、
必ず完結する。

だから人は皆、
いつの時代であっても、
自らの心を正して
生きていかねばならない。

一人一人が
心を正しんと生きることで、
この世はより美しく成り、
やがて地上に、
仏国土が築かれていくのだ。
そのように釈尊は
説いたと言われている。

すなわち真理とは、
人間に霊的なる人生観、
真実の人生観を与えるものである。

炊き出し
つまり真理とは、
「愛」でも、「憎しみ」でも、
「人に対する優しさ」でも、
「人に対する暴力」でも、
他に与えたものは、
来世、来々世以降において、
必ず自らに返ってくる、
ということを教えるものである。
ゆえに真理とは、
人々に正義を見抜く智慧の力を授け、
「悟り」という名の成長を与えることで、
人間個人を善へと導きつつ、
世界全体を繁栄と平和へ導くものである。

そして
古来より日本人は、
「武士道」を通じて真理を学び、
「愛（仁）とは何か」、
「正義が何であるか」
ということを思索することで、
真なる勇気を育んできた。

日本人に「真理」を教えて、
侍精神を育ませてきたもの、
それが「武士道」であった。

日本人ならば誰もが知る、
愛と勇気だけが友達の
正義のヒーロー・アンパンマン。

あのアニメの主題歌は、
こう歌っている。

なんのために生まれて♪
なにをして 生きるのか
こたえられないなんて
そんなのは いやだ！

今を生きることで
熱い こころ 燃える
だから 君は いくんだ
ほほえんで♪

そうだ うれしいんだ
生きるよろこび
たとえ 胸の傷がいたんでも♪

ああ アンパンマン
やさしい 君は
行け！みんなの夢 まもるため♪

悪なる勢力が跋扈し、
日本が滅亡の危機を迎えている現代、
日本人一人一人が
アンパンマンのような
正義のヒーローにならねばならない。

そしてアンパンマンのように、
強く優しい人になるためには、
『人間が何のために生まれて、
何をして生きるべきなのか』、
人生におけるその本質的で、
根本的な問いに、
答えられる『力』を
人は身につけなければならない。

そして真理を学んで、
「生きること」、「死ぬこと」
に関する根本的な問いに、
答えられる力のことを、
「悟り」と言うのだ。

日本人に「真理」を教えて、
「悟り」を与えてきたもの、
それが武士道であった。

すでにエピソード2で、
「日本人」と「武士道」の関係について、
以下のように紹介している。

明治から昭和にかけて
活躍された人物に
新渡戸稲造という方がいる。

彼は外国の教授から
こう言われた。

それでは貴方の国には
宗教教育はないと
そうおっしゃるのですか？

はい、ありません。

宗教教育無しで
どうして人々に
道徳を授けることが
できるのですか？

日本人は
何を基準に
物事の善悪を
学んでいるのですか？

外国の教授の
この言葉の意味が、
現代の日本人には、
なかなか理解し
難いかもしれない。

たとえば1920年の
インドにおいて、
アマラとカマラという
2人の少女が見つかった。

彼女たちは
オオカミに拾われて
育てられたために、
5、6歳で人間に
発見された時、
話すことも、
二足歩行もできず、
暗闇でも四足で走り、

遠吠えをし、
共に幼いうちに
亡くなってしまった。

この悲しき少女たちの話が
果たして何を意味するか
と言えば、

「人間は狼の教育を受ければ、
狼のように成ってしまう
可能性があり、
人間には
人間としての教育が
必要である」ということだ。

しかし国語は言葉の教育であり、
算数や数学は数の教育であり、

科学の本には、
核兵器の作り方は
書かれていても、
それらを使いこなす善悪、
人間としての
正しい生き様については、
何も説かれていない。

そして外国では
キリスト教、
イスラム教、

ユダヤ教
といった宗教が、
人間に善悪を教えて、
人々に道徳を
与えてきたのである。

私たち日本人は
どのようにして道徳を得て、
何に基づいて
物事の善悪を学んでいるのか？

日本人を人間たらしめている
教育とは果たして何なのか？

苦悶を続けた彼はやがて
「日本人には
武士道教育がある」
ということに気が付いた。

こうして新渡戸稲造は、
日本人を外国の方々に
理解してもらおうと
『Bushido:The Soul of Japan』
という書物を世に著した。

大学どころか、
鑑別所しか出てない
私が言うのも何だか、

日本の教育の源流は
武士道に他ならず、
それは
太古の昔から
存在していた。

縄文の昔から
日本人に善悪を教え、
道徳倫理を授け、
日本人を狼ではなく、
人間にしてきたもの、
それは「武士道」であり、
それほどまでに、
日本人と武士道は
とても深い関係にある。

では、武士道とは、
果たして何であるのか？

同じくエピソード2において、
ヤクザの清水の次郎長が、
自分よりも十七も年下の
侍の山岡鉄舟のことを
「俺の親分」
と呼んだことは
すでにご紹介した。

また、これもお伝えしたが、
西郷隆盛はその山岡鉄舟に対して、
次のように述べている。

命もいらず 名もいらず、
官位も金もいらぬ人は、
始末に困るものなり。
この始末に困る人ならでは、
艱難を共にして、
国家の大業は成し得られぬなり。

その山岡鉄舟は言う。

武士道とは
神道にあらず、
儒道にあらず、
仏道にあらず、

武士道とは神儒仏(しんじゅぶつ)、
三道融和の道念(どうねん)

この言葉は、
果たして何を意味しているのか？

たとえば儒教の祖である孔子は
こう述べている。

朝(あした)に道を聞かば
夕(ゆうべ)に死すとも可(か)なり

つまり孔子は、明日の朝に
人間として正しい生き方を知り、
そして自分がその生き方を
体得することができたら、

私はその日の夕方に
死んでしまっても構わない、
そう述べたわけだ。

これは
「命を粗末に扱っている」
という意味ではなく、

「自分はそれだけ道を求めている」
という学びへの情熱を意味している。

「道」とは、
人間としての正しい生き方のこと。

剣道や茶道などに
「道」がという漢字がついているのは、
剣や茶を極めんとすると共に、

それらを通じて、
『人間としても成長していこう』
という想いが込められているからだ。

そして「道を求める想い」のことを、
「求道心」とか、「道念」と言う。

つまり山岡鉄舟は、
「武士道とは、
神道、儒教、仏教が融和し、
神儒仏を学ばんとする
求道心の先にあるもの」、
そう述べたわけである。

実は新渡戸稲造も、
『武士道：日本の魂』の中で、
「武士道は仏教、儒教、神道の
影響を受けて形成されている」
と、山岡鉄舟と似た結論に至っている。

日本人に「真理」を教え、
「人間として生きるべき道」を伝え、
「悟りの力」を授け、
そして「「侍精神」を育んできたもの、
それが「武士道」であり、

そして絶対に日本人と
切って切り離すことのできない
武士道とは、
「神儒仏融和の道念」であった。

しかしすでに述べたように、
悪魔勢力というのは、
「真理を覆い隠す」
ということを戦略にしている。

つまり悪魔勢力の戦略とは、
人間から霊的人生観を引き離し、
唯物的人生観に近づけて、

ギャハハハ

日本にサムライはいない。
滅びるのも時間の問題だ！

人々の心から、
愛と勇気と正義を奪い去る、
ということである。

実際に、全体的にみて
先の大戦に敗れて以来、
悪魔勢力によって、
武士道が奪い取られ、

日本人は
霊的人生観を忘れ、
唯物的人生観に
染められ上げられて、

拝金主義・物質主義に
傾倒し、

ほぼ完全に、
侍精神を失ってきた。

その結果、日本人の心からは、
人々の幸せを考える愛の想いが乏しくなり、
「正義を打ち立てよう」という想いも弱まり、
悪に立ち向かう勇気も失われてきた。

確実に先の敗戦以来、
科学の進歩も重なって、
日本には唯物論者が増えているのだ。

ここで今一度、
エピソード4で紹介した一部を、
ご紹介したい。

悪魔とか、霊とか、
そんな非科学的もの、
いるわけないだろ！

科学的なアプローチによって、
霊の存在を証明しようと
試みている人は大勢いる。

天才科学者
ニコラ・テスラは
生体からのコロナ放電の像が
得られる事を発見した。

これは『キルリアン写真』
と呼ばれ、
オーラが撮れる写真、
と言われている。

すべてのカラスが、
黒くないことを
証明するためには、
白いカラスを
たった一羽、
見つければ良い。

しかし残念ながら、
未だ完全なる
霊の科学的存在証明は
できてはいない。

しかし霊の存在を、

心霊写真

認めざるを得ない事例は、

ポルターガイスト

世界中に存在している。

エクソシスト

その代表的な
ものの一つが臨死体験だ。

たとえばある女性が
自分の手術中に臨死体験をして、
どんな手術をしていたかを
ピタリと言い当てた事例がある。

当たっている・・・。
そ、そんなバカな！

先生って意外に
男前なんですね♡

しかもその女性は
先天性の全盲であった。

臨死体験の中でも
特に興味深い事例は、
やはり
エベン・アレグザンダー
医師の臨死体験だ。

なぜなら彼は
脳科学の分野において、
世界的権威の医師であり、
しかも彼自身、
「霊なんて存在しない」
と考える
唯物論者だったからだ。

そんな彼が、
自身の臨死体験から、
その時の自分の脳が、
夢や幻想を見ることができない
昏睡状態にあったことを
科学的に確認した。

脳が幻覚すら見られない
状態なのに、
彼は様々な映像を見たのだ。

また臨死体験の中で彼は、
見知らぬ女性に出会って、
こう言われたという。

貴方は多くの人から
愛されています。
お帰り頂いたほうが
良いでしょう。

その後、彼は、
実は自分には
生き別れた妹がいて、
すでに彼女が、
十一年前に
若くして亡くなって
いたことを知る。

この女性はあの時の！

その後、彼は世界中で
講演を続けている。

霊は確実に存在し、
肉体の死後にも生命は続く。

私はこれが分かったことで、
より生きる意味を理解できた。

「生きる意味」を知る、
それこそ武士道。

「脳医学の権威である科学者が、
自身の臨死体験を通じて、
科学的に霊の証明に挑戦している」、
これはとても興味深い事例だが、

実は似たような事例は、
他にも起きている。

なぜなら
エピソード4で述べたように、
すでに科学や数学の世界では、
「縦、横、高さといった
3つの軸から成り立つ、

この三次元世界を包み込むように
四次元以降の高次元世界が
存在している」
と言われているからだ。

アニメ『ドラえもん』では、
『四次元ポケット』とか、
『どこでもドア』とか、
『タイムマシン』とか、
時空間を飛び越える道具が、
いろいろと登場するために、
実は割と日本人は、
高次元世界について理解が深い。

マサチューセッツ工科大学の
リサ・ランドールという
女性理論物理学者は、
まるで幽霊のように、
この世界から姿を消して、
再びこの世界に
姿を現す素粒子が
存在している矛盾にぶつかった。

「質量保存の法則」
というものがあって、
もしも質量が消えるならば、
何らかのエネルギーに
変換されたはずである。

実は広島や長崎に
落とされた原爆も
1円玉一個（1g）
くらいの質量が
エネルギーに変わった
と言われている。

つまり素粒子が消えたり、
現れたりするということは、
「質量保存の法則」から考えると、
明らかに説明がつかないのだ。

そのために
彼女は研究の結果、
理論上、高次元世界の
存在を実証してみせた。

私たちはその世界に行けないが、
確実に四次元以降の高次元世界は、
この三次元世界を
包み込むように存在している。

あの世とは結局、
高次元世界なのだ。

そして真理の学びを深める上で、
とても興味深い臨死体験が、
ダニオン・ブリンクリーの話である。

彼は自宅で電話中に、
間接的に落雷した。

彼は元CIAの工作員で、
なおかつ軍人として、
ベトナム戦争にも参加したり、
アメリカと敵対する国々の要人を
たくさん暗殺してきた人物である。

ベトナム戦争の最中、
彼は遠くからベトナム軍の司令官を
狙撃したことがあった。

臨死体験の中で、
彼がそのシーンを見せられた時、
自分が銃で脳天を撃たれた時の混乱、
霊として体を離れて、
もう家には帰れず、
家族に会えない悲しみ、

「死亡通知」を受け取る
家族の悲しみと同時に、
一家の大黒柱である働き手を失った
家族の途方に暮れる不安まで、
彼はまるで自分のことのように
感じさせられたという。

また彼は、上からの命令で、
アメリカに同調しない国の
政府役人を暗殺するため、
ホテル丸ごと
吹き飛ばしたこともあった。

もちろんそのホテルには、
政府役人の他に50人ほど
多くの滞在者がいたのだが、
その当時の彼は、

（アメリカを敵にする）ヤツラと
行動を共にしていたんだから、
死ぬのは当然の報いだ。

と、まったく良心を
痛めなかった。

しかし彼は臨死体験の中で、
この事件をもう一度見せられた時、
次々と押し寄せてくる
感情と情報に圧倒された。

殺された人々が、
自分たちの人生が突然、
断ち切られたことに気がつき、
恐怖し、途方に暮れる、
それらの感情を感じ取り、
彼は正真正銘の恐怖を感じた。

それだけではなく、
一瞬で殺された彼らの家族の
悲しみと苦しみが次々と伝わり、

さらには大勢の人々が一瞬にして
この地上から消え去ったために、
未来に被る損失まで感じたという。

その他にも彼は、
アメリカに友好的な国々に
武器を輸送する任務にもついていた。

生きている当時の彼は、
武器輸送の任務が終われば
飛行機に戻り、
帰国することができたのだが、

しかし臨死体験の時は、
そうはいかなかった。

彼は武器と共に当地に残り、
武器を使って殺戮が行われる現場まで、
ついて行かねばならなかった。

自分が運んだ武器が、
罪人を殺すために
使われることもあれば、

まったく罪のない人々が
容赦なく殺されるために
使われることもたくさんあった。

直接、自分が行っていない
戦争における間接的な役割りによって、
生み出してしまった結果を

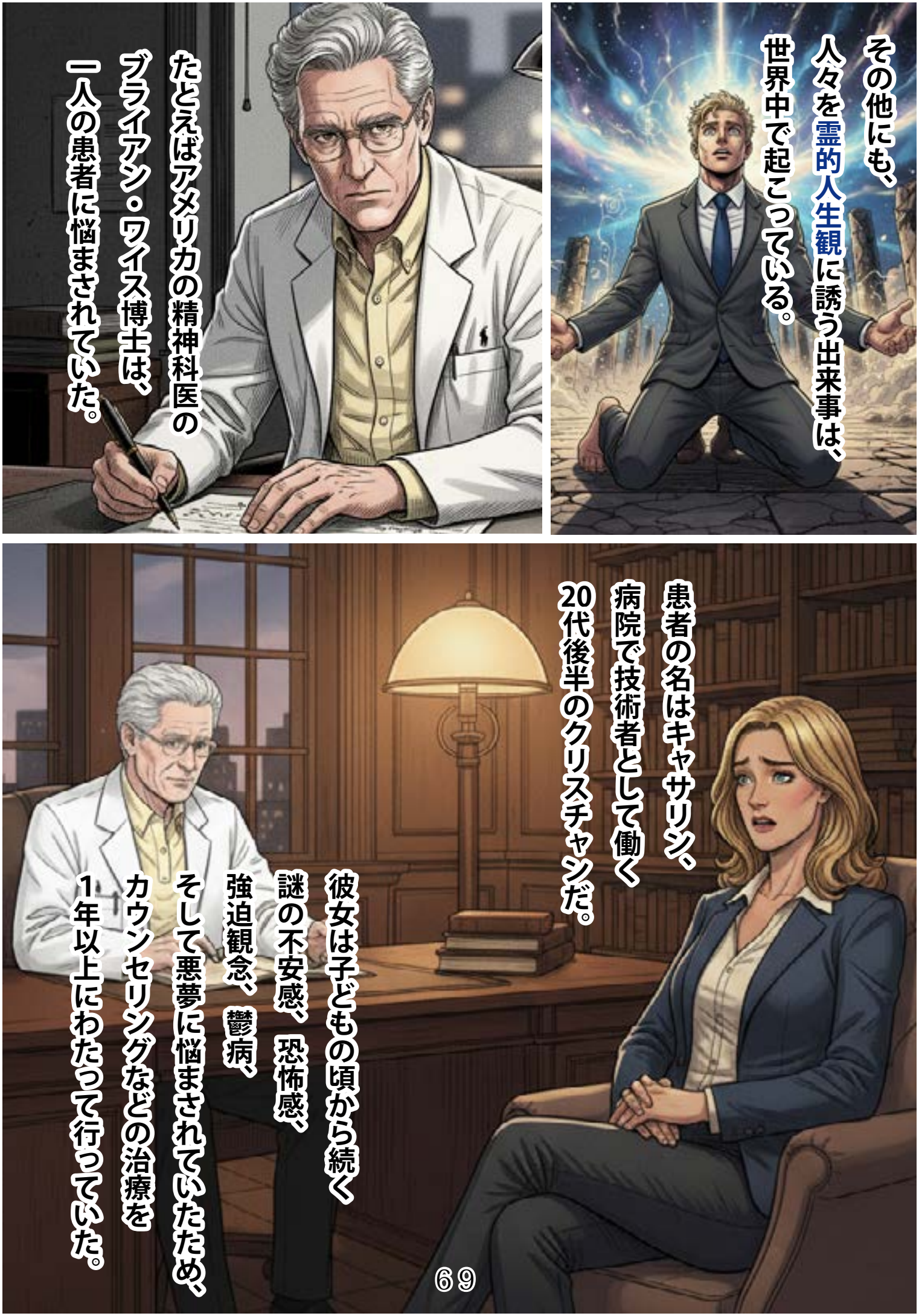
自分の体験として
経験させられることは、
彼にとって恐怖でしかなかった。

ダニオン・ブリンクリーは、
臨死体験をしている時、
光り輝く天使のような存在から、
こう言われたそうだ。

私たちは一つの輪なのです。
貴方の行動は、
その同じ鎖の中にある他の輪に
影響を与えるのです。

この天使の言葉は、
仏教の善因善果・悪因悪果という
「因果の理法」と同じことを意味している。

ダニオン・ブリンクリーは、
この臨死体験を通じて、
それまでの自己中心的で
傲慢な人生を悔い改めて、
「トワイス・ボーン」、
つまり二度目の誕生を果たした。


その他にも、
人々を霊的人生観に誘う出来事は、
世界中で起こっている。
たとえばアメリカの精神科医の
ブライアン・ワイス博士は、
一人の患者に悩まされていた。
患者の名はキャサリン、
病院で技術者として働く
20代後半のクリスチャンだ。
彼女は子どもの頃から続く
謎の不安感、恐怖感、
強迫観念、鬱病、
そして悪夢に悩まされていたため、
カウンセリングなどの治療を
1年以上にわたって行っていた。

知的で信仰を持つ彼女なら
十分に改善しておかしくないのに、
しかしキャサリンの症状は
一向に改善されなかった。

「催眠療法」とは、
脳の働きを利用した
心理技術のことで、
一定の効果が
科学的にも認められている。
心理学で言われる
「表面意識」の働きを弱めて
深い集中状態に入ることで、
普段は自覚しにくい「潜在意識」
にアクセスしていくのだ。
その結果、
忘れていた記憶や
感情を思い出すことで、
心の傷を癒す
効果がある。

たとえば赤ん坊の頃、
看護婦さんが手を滑らせて、
床に落ちてしまった場合、

本人はその出来事を
記憶していなくても、
高所恐怖症になる
ということがある。

そこで催眠療法によって、
「潜在意識」に
眠っている過去の記憶を
「表面意識」に取り戻すことで、
高所恐怖症が治る
ということが実際にあるのだ。

ワイス博士は、
キャサリンにも
表面意識で思い出せない
過去のトラウマがあると思い
催眠療法を行った。

キャサリン。

それでは、
小学校の頃まで、
記憶を戻って
みましょう。

するとキャサリンは
深い催眠状態に入り、

普通の意識の状態では、
けっして思い出せない
数々の出来事を語り始めた。

プールの飛び込み台に恐る恐る立っていたら、

誰かに後ろから押されたの。

水の中で息ができない…

泳ぎは苦手だから怖い…！

次は、幼稚園まで戻ってみましょう。

歯医者でドクターが私にガスマスクを…

苦しい！息ができない！

お酒に酔ったパパが、私の胸を…

やめて！パパ！

叫びたいのに、口を抑えられて声が出ない…

そんなことが、幼い頃に…。

だが、きっとこれで症状は改善するだろう。

しかし彼女の症状は、
少しも改善することはなかった。

そこでワイス博士は、
さらに深い心の傷を探るため
再びキャサリンに
「催眠療法」を試すことにした。

するとキャサリンは
前回と同じ記憶を
語り出した。

お酒に
酔ったパパが、
私の胸を…

これでは
前回と同じだ…

ではキャサリン、

貴方の症状の
原因となった頃まで、
戻ってみてください。

この時ワイス博士は、
うっかり具体的な
指示を出さずに、
おおざっぱな指示を
出してしまった。

「きっと幼稚園の頃に戻るだろう」、ワイス博士はそう思っていたが、キャサリンは驚くべき記憶を語り始めた。

ここは今から約四千年前

場所は中近東、私の髪の色は今と違って黒く…

彼女は一体何を語っているんだ…!?

なんとキャサリンは、四千年前の過去世の人生について語り始め、本人がまったく知らないその土地の風土、自分の服装や日常生活まで、事細かく語りはじめた。

さらには
その人生で起きた、
様々な出来事や
事件も語った。

私は腕に
赤ん坊を
抱いている…

これは
津波だわ…。

お願い！
私の子を連れて
いかないで！

その人生において、
彼女は抱いていた
赤ん坊を
津波によってさらわれ、
そして自分も
溺れ死んだのだ。

私は一体、何を見ているんだ！

それだけではなかった。
彼女はさらに
別の人生まで語り始めた。

一つの人生は、
18世紀のスペインで、
売春婦をしていた時のもの。

もう一つの人生は、
中近東の過去世から数百年後、
ギリシャ人だった時のもの、
つまり
「過去世の記憶」だ。

彼は衝撃を受けた。

キャサリンは
クリスチャンだ。
そして
キリスト教には、
天国と地獄という
「あの世」の
概念はあっても、

仏教で言う「転生輪廻」、
つまり生まれ変わりの
概念は無い。

また、ワイス博士自も、
生まれ変わりを
信じていなかったから、

退行催眠で
キャサリンが語る
「過去世の記憶」は
彼らにとって
衝撃的なものだった。

しかし
もっと衝撃的なことは、
これまで様々な
治療を試しても、
彼女の不安感、
恐怖感、
強迫観念、鬱病、
悪夢といった
症状は改善
されなかったが、

しかし
この出来事を機に、
彼女の症状は
いちじるしく
改善していった。

そして彼は
一冊の本に出合う。

それは、エピソード4で
紹介したイアン・
スティーブンソン博士が
書かれた
『前世を記憶する子どもたち』
という書籍であった。

ここで今一度、
エピソード4の
一部を紹介したい。

バージニア大学の
イアン・スティーブンソン博士は、
生まれ変わりの研究を行った
人物である。
PSYCHIATRY

彼は熱意と信念で、
前世の記憶を
語る子どもたちと会い、
二千例もの記録を
取った人物である。

たとえばスリランカの少年チャトラ。

僕は事故にあって亡くなったんだ。

同じ村の青年だった。

彼は亡くなった青年の職業や家族構成、死亡時の状況などを詳細に語り、

実際に該当する人物が存在していたことも確認された。

しかも少年の体には亡くなった青年の傷跡と酷似した先天的なアザがあった。

前世を語る研究では
こんな話もある。
シャンティ・デヴィ（5歳・インド）

私はムトラって
街に住んでいたの。
夫と子どももいたわ。

でも出産したあと
亡くなったの。

最初、周囲の大人たちは
誰も信じなかった。

しかし何度も同じ内容を
話すために、
彼女が語った
住所や夫の名前を調べてみると、
ムトラという街には、
確かに少女が語った
夫と同じ名前の男性が
今も住んでいて、

彼女が語った前世の記憶と
まったく同じだった。
なぜこの少女は、
そんなことまで
知っているんだ・・・。
こうした前世の記憶は、
大人になって
自我が芽生えていくと、
次第に忘れていくという。

「過去世」というものに対して
懐疑的であった
ブライアン・L・ワイス博士は、
前世に関する書籍を
読みあさるうちに、
やがてその存在を
確信するに至った。

人は
生まれ変わりを
繰り返している！

過去の人生は、
今回の人生に
何らかの影響を
与えていて、

まったく
無関係という
ことはない！

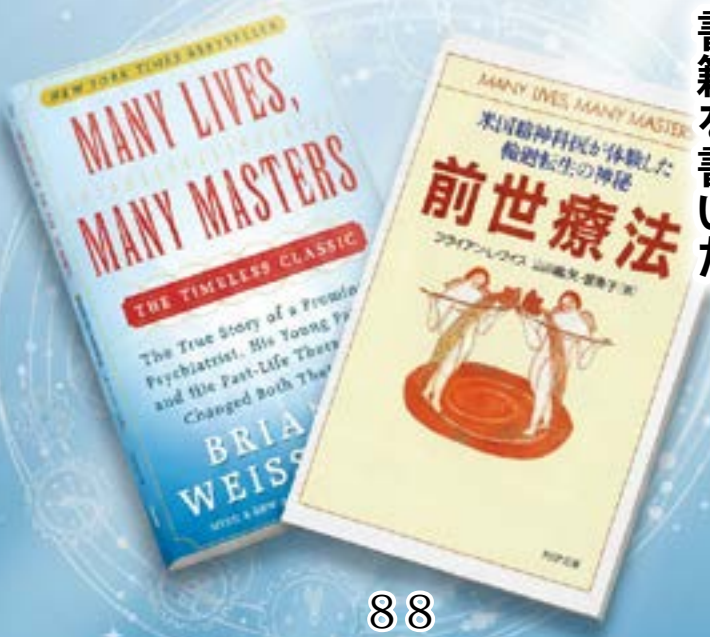
それ以降、ワイス博士は
精神科医としての治療方法を
大幅に変えていった。

というのも何度も通院し、
時間とお金もかかる
治療法よりも、

過去世にまで戻る
「前世療法」のほうが、
すみやかに治療できることが、
分かったからである。

こうして彼は、
何百人も患者を
「前世療法」でもって治療し、
そしてそこで得た
知識と経験をまとめて
書籍を書いた。

『前世療法』というその書籍は
世界的ベストセラーとなり、
今なお反響を呼び続けている。

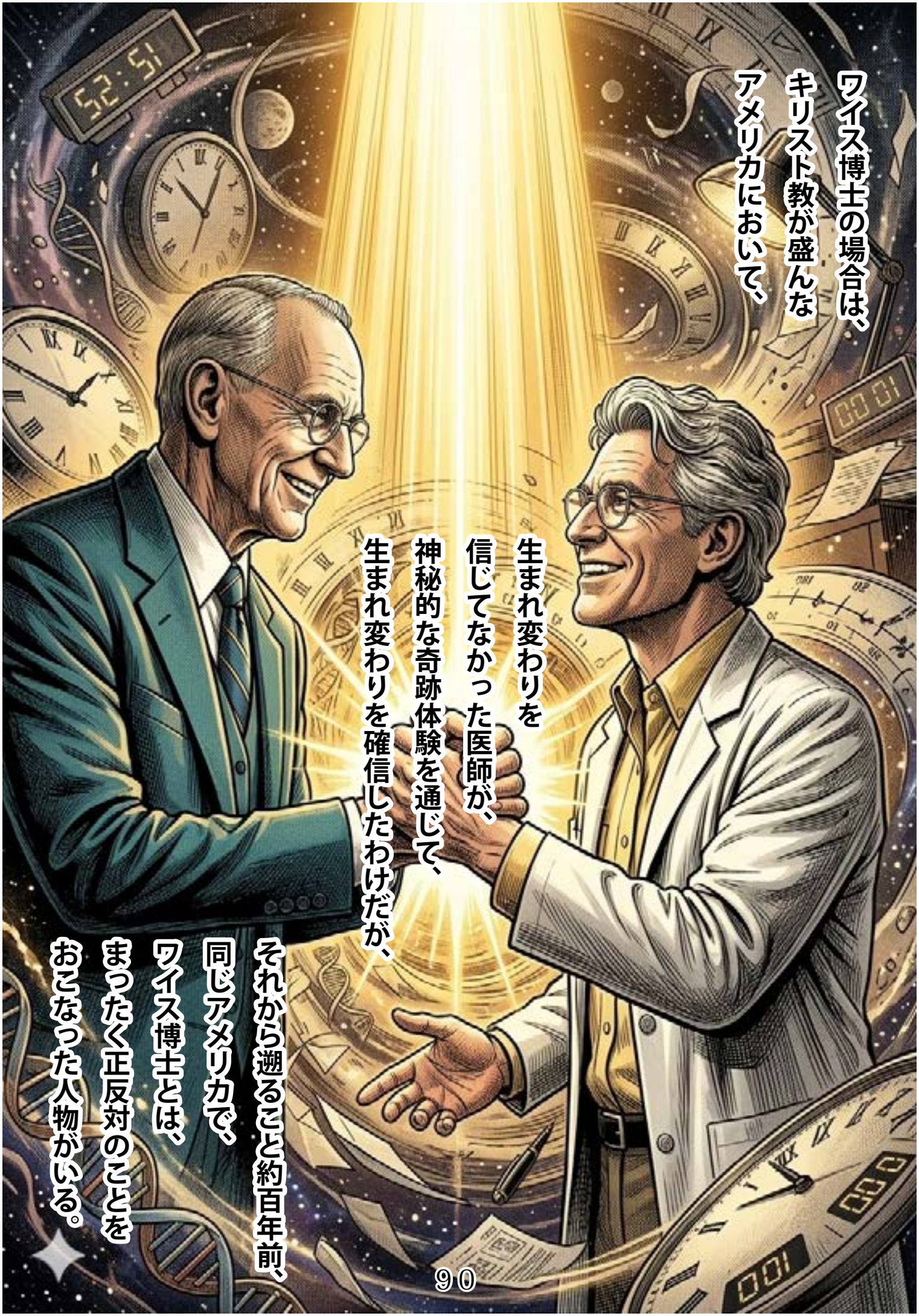


ワイス博士はこう答える。

「過去世と現世の関係を知れば、
人に危害を加えたいとか、
復讐したいとかは
思わなくなるだろう。
なぜなら自分が与えたことは、
ブーメランのように、
必ずいつかの人生において、
自分に返ってくるのだから。」

ブライアン・ワイス博士の
著書の中でも、
とても興味深い話がある。
それはまさに、
「運命の赤い糸」
とも言える、
転生を超えた
恋愛ストーリーだ。

興味ある方は、
ぜひQRコードから、
動画をご覧になって欲しい。


ワイス博士の場合は、
キリスト教が盛んな
アメリカにおいて、
生まれ変わりを
信じてなかった医師が、
神秘的な奇跡体験を通じて、
生まれ変わりを確信したわけだが、
それから遡ること約百年前、
同じアメリカで、
ワイス博士とは、
まったく正反対のことを
おこなった人物がいる。

それが「眠れる預言者」と言われる、
エドガー・ケイシーである。

「預言者」とは、
未来を予知する者ではなく、
神の言葉を預かる者のことである。

彼は医師免許を持たず、
医学知識など皆無なのに、
しかし自身が催眠状態になることで、
大勢の人々の治療を行ったのだ。

そして彼自身、
敬虔(けいけん)なクリスチャンであるために、
生まれ変わりについて、
まったく信じていなかった。

しかし彼は
自身の神秘体験を通じて、
「人は生まれ変わりを
繰り返している」
と確信するにいたった。

なぜ、医学知識の無い彼が、
催眠状態の中で医療行為を
行うにいたったのかと言うと、

若い頃の彼は
ある時、謎の奇病にかかり、
突如、声が出なくなってしまった。

彼は様々な病院に行ったのだが、
しかしまったく解決せず、

そこで彼は催眠術に出会い、
藁にもすがる想いで、
自身を催眠状態に置くことで、
まったく医学知識が
無いにもかかわらず、
なぜか自分の病の解決方法を答える、
という不思議な体験をした。

この神秘体験は、
周囲の人々のみならず、
自分自身を驚かせた。

その当時、ケンタッキー州の
ケッチャムという医者は
小さな病院を開いていたのだが、
母親に連れられてきた
少年の足を見て
彼は頭を悩ませていた。

そしてこの医者は、
自分で治療法の解決が
つかなくなると、

医学部どころか大学も出ていない
平凡な写真技師であった
エドガー・ケイシーのもとを
訪れることを日課にしていた。

この子どもの治療法を
答えてください。

足の傷は、
感染症が長引いて、
適正な治療をしないと
切断しなければならない。

最初はひっかき傷だったが、
泥に触れて、
子どもが洗わなかったので、
雑菌が入った。

そこに色々な薬品をつけたので、
逆に悪化して、
自然治癒を妨げている。

どうすれば足を切断せずに助かる？

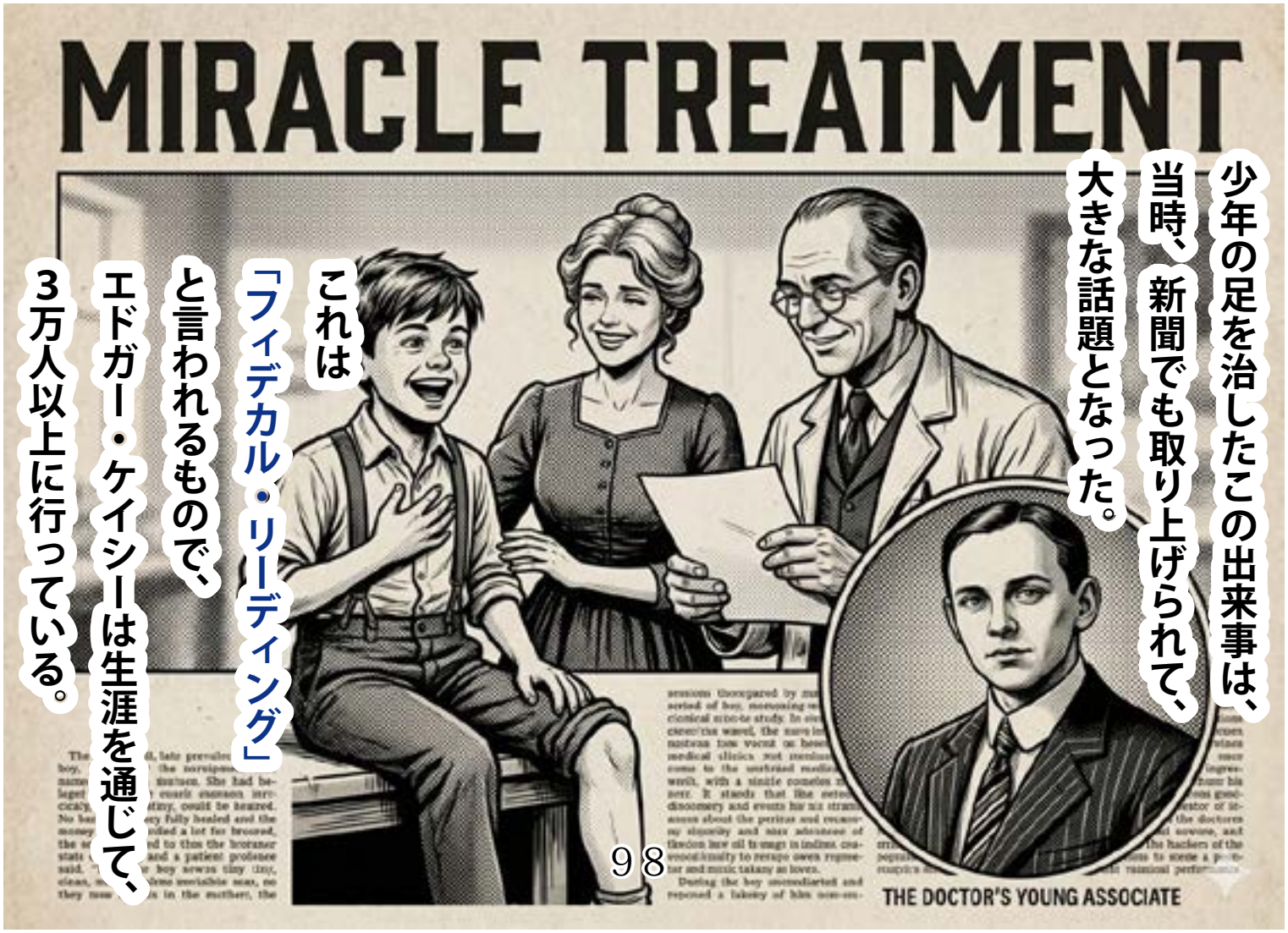
「オイル・オブ・スモーク」
という薬が有効である。
この薬は製造中止になっている。

しかしケンタッキーの
ルイビルには、
まだ売っている薬局がある。

ST. JUDE'S HOSPITAL
MEDICAL CHART
確かにその薬は、以前はウチの薬局でも売っていましたが、残念ですが、今は売っていません。

残念ながら君が言った「オイル・オブ・スモーク」だが、その薬局には、もうないそうだ。
そんなことはない。薬剤師がいつも使うガラス棚、その棚のずっと奥に、壁にひっついて薬は隠れている。

薬剤師が半信半疑で種を調べると、
たしかにケイシーの言う通り、
棚には『オイル・オブ・スモーク』
という薬があった。



少年の足を治したこの出来事は、
当時、新聞でも取り上げられて、
大きな話題となった。

これは
「フィデカル・リーディング」
と言われるもので、
エドガー・ケイシーは生涯を通じて、
3万人以上に行っている。

しかし当初、ケイシーは、
「フィデカル・リーディング」を
行うことを拒んでいた。

なぜなら彼は、
催眠状態の中で、
自分が何を話しているのか、
まったく憶えていないために、

「もしかしたら誰かに
間違ったことを話して
病状を悪化させて
しまうかもしれない」
と考えていたからだ。

しかし彼に助けを求める人々は、
後を絶たなかった。

そのために、
「人助けになるならば」
という思いで、
ケイシーは、
「フィデカル・リーディング」
を行うことを決意した。

しかしケイシーの
リーディングの中でも、
特に興味深いのは、
「ライフ・リーディング」である。

印刷工を営む
アーサー・ラマースという人物は
こう考えた。

医学知識の無いケイシーが、
人々の病の治療法を
答えられるのならば、
「人が死んだらどうなるのか」、
その問にも答えられるのでは？

人間の魂はどうなるのか？

人間の魂とは
リンカーネイション（転生輪廻）、
つまり魂は生まれ変わりを
続ける存在である。

すでに述べたように
キリスト教には
生まれ変わりの教えはない。

そのために、
敬虔なクリスチャンである
ケイシーには
『リンカーネイション』という言葉は、
受け入れられない言葉だった。

私の中に悪魔が入り込んだのでは？

ケイシーは酷く落ち込み悩み続けた。

しかし彼は
『聖書』を学び直してみた。

イエスは転生輪廻を否定していない。
いや、イエスは生まれ変わりを
むしろ肯定しているのでは？

新約聖書

イスラエルの民の先祖は
アブラハムという人物であるが、
『聖書』の中で、
イエスはこう言っている。

よくよく貴方がたに
言っておく。

アブラハムの生れる前から
私はいるのである。
ヨハネの福音書8章58節

イエスは自身の髪の毛について、何も語ってはいない。
しかしイエスに髪の毛がなかったわけでない。
新約聖書

これと同様に、イエスはリンカーネイションを明確には語ってはいないが、しかし明確に否定もしていない。
いや、むしろイエスは、リンカーネイションを肯定している！
こうしていつしかエドガー・ケイシーも、仏教で説かれる転生輪廻を確信していく。

世界でも最も売れた書物は、
キリスト教のバイブル
『新約聖書』であり、

世界で最も知名度が高い人物は、
キリスト教の開祖である
イエス・キリストである。

そしてたとえ
クリスチャンではなくても、
世界中の多くの人が、
彼の誕生日を楽しんでいる。

しかも『新約聖書』を編纂したのは、
イエス亡き後の弟子たちであるから、
神性なる『聖書』に、
人間的な意図や思惑が加わった可能性は
確実に存在している。

それはつまり、
「イエスが説き切れていない
真理がまだ他にあった」

「イエスが説いた真理が
『聖書』に記されず削除されてしまった」
という可能性があることを意味する。

だから
エドガー・ケイシーのような人物が
現れて真理を説くのだ。

眠れる預言者
エドガー・ケーシーが、
数多くの
ライフ・リーディング
によって語ったこと、
それは
人間は幾転生を
繰り返しながら、
魂を磨いて、
成長を遂げている
霊的存在であり、
過去世が
今世に影響をおよぼし、
そして今世、
いかなる人生を
生き抜くかによって、
来世以降も
大きく変わっていく、
ということであった。
これは
本当の仏教で
説かれている
真理である。

では、なぜエドガー・ケイシーは、
医学知識がまったく無いのに、
多くの人々の治療法を答えるのみならず、
本人がまったく信じていなかった、
「転生輪廻の秘密」まで、
説くことができたのだろうか？

それは彼が、
「黙示録のヨハネ」と同様に、
過去、現在、未来にいたる
すべての出来事が記された
霊界の図書館
「アカシック・レコード」に、
触れていたからだ。

『聖書』には、
「人は蒔いた通りに
刈り取らねばならない」
と記されているが、

ケイシーによれば、
人生で努力して修得したものは、
決して無駄にはならないという。

たとえばニューヨークで
モデルとして活躍している
ある女性が
ライフ・リーディングを
受けてみたところ、

彼女は過去世において
修道女であり、その時、
人が嫌がり、汚れる仕事を
率先して行っていたことが
明らかになった。

その原因の結果として、
彼女は今世、
誰よりも美しい容姿を持ち、
モデルとして
成功をおさめていたという。
今世における苦難や困難、
あるいは努力や忍耐は、
来世における
「幸せの種」でしかないのだ。

たとえば18世紀のドイツにおいて、
とある父親が息子にピアノを教えて、
その休憩中に紅茶を飲みながら、
庭を眺めていた。
すると一度も聴いたことのない
とても美しい調べが、
どこからともなく聴こえてきて、
彼は衝撃を受けた。

それはまだ5歳ほどの我が子が、
なんと作曲して弾いていたのだ。

その子の名を
アマデウス・モーツァルトという。

ケイシーによれば、
今世における努力は、
絶対に無駄にはならず、

何らかの分野において、
幼少期から
天才的な才能を発揮する人は[1]、
過去世からの努力と忍耐の
積み重ねによるものだという。

しかし原因と結果の法則は、
善いことばかりではない。

たとえばある女性は、
金銭的、健康面、人間関係など、
次から次へと
あらゆる不幸な出来事が
身に起こっていた。

そこでケイシーによる
「ライフリーディング」を
行ってみると、

とんでもない
恐ろしい事実が明らかになった。

それはローマ帝国の中でも、
まだキリスト教が新興宗教の頃、
クリスチャンたちが、
並々ならぬ迫害を
受けていた時代、

彼女はクリスチャンたちを
迫害する立場の貴族として、
とても裕福な人生を生きていた。

その当時の彼女は、
次々とクリスチャンたちが
コロシアムでライオンに殺され、
食べられていく悲惨な光景を、

特等席で、ワインを片手に
ご馳走様を頬張りながら、
喜んで観戦していたのだ。

真理を迫害する立場に立ち、
愛も慈悲のカケラもない
人生の業（カルマ）の刈り取りとして、

彼女は今世の人生において、
次から次へと、
様々な災いが降りかかっており、

真理を迫害した
己の無知による愚かさを
反省すると同時に、

苦しい環境にある
人々への憐みの心を、
彼女は今まさに
学んでいるというのだ。

彼女は、
こうしたライフ・リーディングを通して、
自らの人生の真実を知り、
それを潔く受け入れて、
そして己の心の過ち、
つまり自らの愚かさを
深く反省したことで、
その後の人生が
前進していった。

「死ねば何もなくなる」
という唯物的人生観であると、
どうしても人間は、
快楽的になり過ぎて、
他人の悲しみや苦しみに、
無関心になるばかりか、
とても利己的で、
傲慢になってしまいがちだ。

しかし人間は真理を学び、
「転生輪廻」を知り、
「因果の理法」を知り、
さらには「天国地獄」をも知って、
霊的人生観を築き上げていくと、

傲慢な心を持って生きることが、
結果的に
自分を苦しめることになり、
いかに愚かで哀れであるかを
知ることになる。

むしろ人は、
真理を学び、自らの心を見つめ、
心の過ちを謙虚に反省し、
悟りを得ることで、
この世における執着を断ち切り、
愛深く勇気あふれる人生を
生きられるのだ。

座禅の真の目的、
それは
心の塵(ちり)や垢(あか)を落とし、
心を静寂にすることにあり、
そして実はそこに、
真なる武士道がある。

さて、さらに真理の学びを深ていきたい。

近年、『ダ・ヴィンチコード』という映画が話題となり、

そして世界中の多くの国々で、「キリスト教への冒涜だ」という理由から、上映禁止になったことがある。

その理由は、『聖書』に記されているイエスの教え（4つの福音書）以外にも、実は福音書（イエスの教え）が他にも存在しており、その異端視されている福音書では、

「独身を通したイエスには実は妻がいて、その妻とはマグダラのマリアであった」ということが記されており、その異端書を映画の中心に据えているからだ。

マグダラのマリアとは、
イエスの母の聖母マリアとは、
まったく異なる人物であり、
七つの悪霊に憑かれていたが、
イエスによって回心し、
享楽的な生活を捨て去り、
『トワイスボーン』を果たしたと
言われている女性のことである。

ちなみに七つの大罪として、
傲慢・嫉妬・憤怒・怠惰・強欲・暴食・色欲がある。

ある時、ユダヤ教の律法学者たちが、
一人の女を連れて来て、
石を握りしめながら、試すように、
イエスにこう言った。

この女は姦淫の罪を犯した。
モーセの律法では石打の刑に
処されることになっている。

さぁ、貴方はどうされるのか？

取り巻きの観衆たちも、
「殺せ！殺せ」と騒ぎ立てる。
愛の人イエスが「赦(ゆる)す」と言えば、
律法を破ったことになり、
イエスが殺されかねず、
「石打の刑」と言えば、
イエスに付き従う人々から、
イエスが信頼を失うことになる。

するとイエスはこう言った。
貴方がたのうち、
一度も罪を犯したことの無い者から、
まずこの女に石を投げつけるがいい。

律法学者も、観衆たちも、
誰一人として
石を投げることはできなかった。

なぜなら一度も、
罪を犯したことが無い人など、
いるはずもないからだ。

そのために、
一人去り、二人去りと、
次々と帰っていった。

ついにイエスと女だけになった。

女よ、皆はどこにいるか？
貴女を罰する者はなかったのか？

誰もございません。

私も貴女を罰しない。
お帰りなさい。

今後はもう罪を犯さないように。

この姦淫の罪を犯した女性と、
七つの悪霊に憑かれていたマリアを、
カトリック教会は同一視してきたが、
しかし確たる証拠はない。

天才画家レオナルド・ダ・ヴィンチは、
ミラノのサンタ・マリア・
デッレ・グラツィエ教会にある
修道院の食堂の壁に
『最後の晩餐』を
描いたことで有名である。

そしてそれは
「イエス・キリストと
十二使徒の最後の食事の場面」
と言われている。

ところがイエスの隣にいる人物が、
明らかに女性に見えて、
「マグダラのマリアではないか」
という説があるのだ。

そして『聖書』に記されることなく、
偽典とされた福音書には、
「イエスとマグダラのマリアが、
結婚している」
という驚愕の描写がある。

そのために
「レオナルド・ダ・ヴィンチは、
『最後の晩餐』の壁画に、
偽典の福音書に記されている
『イエスの妻はマグダラのマリア』
という描写を描いたのでは？」
という説があるのだ。

しかしさらに問題なのは、
『新約聖書』に載せられることのなく、
偽典とされている福音書には、
実は「生まれ変わりの思想」が
描かれている、ということだ。

つまりイエスは、
実は「生まれ変わりの教え」、
すなわち「転生輪廻の思想」を持ち、
説いていたのだが、
しかしキリスト教カトリック教会が、
その教えを勝手に省いてしまった
可能性は捨てきれないわけである。

実のところ
初期のキリスト教世界では、
「人は生まれ変わりをしているのか？
それとも人生は一度きりなのか？」
ということが議論されていた。

そして西暦553年、
キリスト教の教義を決定づけるために、
「コンスタンティノープル公会議」
が行われた。
この会議の中で、
「人間の魂は一度死を迎えた後、
天国や地獄へ行き、
生まれ変わりはない」
ということが決定された。

『人間の魂に関する重大なこと』が、
一部の人々による会議によって
決められたわけだが、

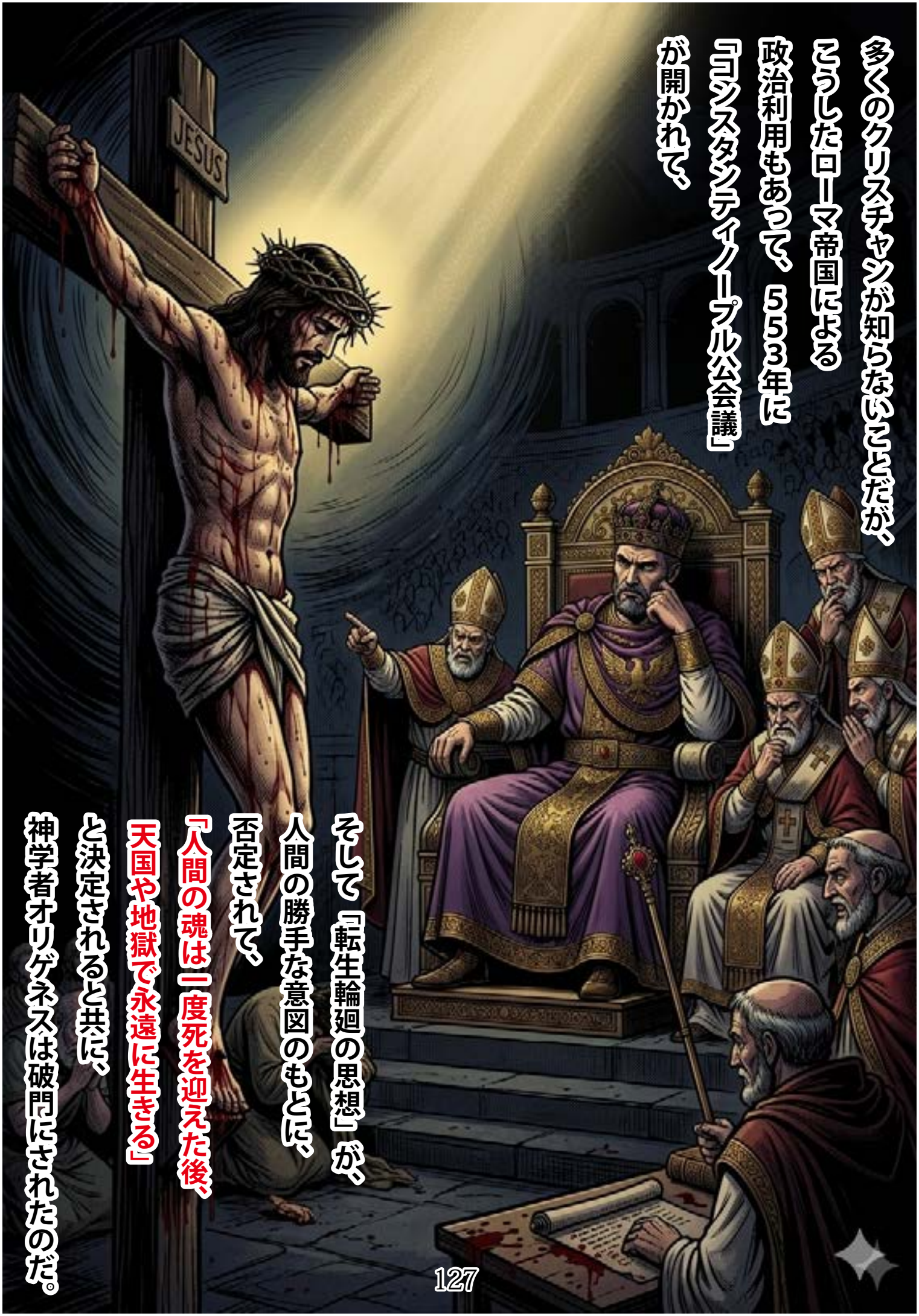
それはつまり、
「真理が人間のエゴによって
曲げて伝えられてきた」
ということを意味する。

そしてこの時、
オリゲネスという
古代キリスト教最大の神学者が、
カトリック教会から破門にされた。

なぜならこの神学者は、
哲学者プラトンからも学び、
「人の魂は生まれ変わっている」
という真理を説いていたからだ。

実は残念ながら当時の
キリスト・カトリック教会は、
ローマ帝国によって
激しい迫害を受けた後、
ローマ帝国の国教となったわけだが、
政治的に利用されていた。

皇帝ユスティニアヌス1世は、
「民衆が
『何度も人生が存在している』
という考え方を持つより、
民衆が
『たった一度だけの人生しかない』
という考え方を持ったほうが、
大人しくなって国を統治し易い」
と考えた。



多くのクリスチャンが知らないことだが、
こうしたローマ帝国による
政治利用もあって、553年に
「コンスタンティノープル公会議」
が開かれて、

そして「転生輪廻の思想」が、
人間の勝手な意図のもとに、
否定されて、
「人間の魂は一度死を迎えた後、
天国や地獄で永遠に生きる」
と決定されると共に、
神学者オリゲネスは破門にされたのだ。

しかし「生まれ変わり」を認める
異端にされた福音書は、
密かに地下で売買されてきた。

そしてダ・ヴィンチの
『最後の晩餐』の壁画は、
どうしてもイエスの隣の人物が、
女性に見えるし、
また彼女の首を
初代教皇ペテロが、
狙っているようにも見えなくもない。

ちなみに生前のダ・ヴィンチの日記が、
現代になって見つかっているが、
驚くべきはカトリック教会に対する、
彼の批判と罵倒の言葉の数々である。

だからもしかしたら
レオナルド・ダ・ヴィンチは、
マルチン・ルターとは違うカタチで、
キリスト教カトリック教会に対して、
密かな抵抗、抗議をしたのかもしれない。

1500年代、ローマ教皇レオ10世は、財政難に困り、「免罪符」というものを売りにだした。

免罪符を購入することで、現世での罪が許されて天国に行ける！

賽銭箱に「チャリン」と音がする度に貴方がたの魂は天国に近づく！

ルターはこれに烈火の如く怒った。

人の魂が天に近づくのは、神への信仰を基に、悔い改めた時ではないか！

そして彼は、
「95条の論題」を掲げて、
カトリック教会内部で、
きちんと議論しようとした。

人は信仰によってのみ義とされる！

すると議論するどころか、
彼はあっさり、
キリスト教会から、
破門にされてしまった。

それは当時において、
「死」よりも厳しいことであった。

なんで喪服なんか着ているのか？

なぜなら貴方の神が死んだからです。

バ、バカな！
神が死ぬわけっ・・・！

そ、そうか！

たとえカトリック教会から
破門されても、
神が消滅したわけではない、
こうして彼は、
カトリック教会が、
強い権力を持っている時代に、
「プロテスタント」
という宗派を命懸けで築いた。

だから可能性として、
レオナルド・ダ・ヴィンチも、
マルチン・ルターとは、
異なるカタチで、
カトリック教会に抗議、抵抗して、
あえて『最後の晩餐』の壁画に、
イエスの隣にマグダラのマリアを
描いたのだろう。

そしてもしもそうであるならば、
それは超天才レオナルド・ダ・ヴィンチが、
こう考えていたことを意味する。

『聖書』に載せられなかった
偽典とされている福音書にも、
真理はある。

たしかに人は、
リンカーネイション、
生まれ変わりを繰り返している。

長年、人類の謎とされてきた
『最後の晩餐』の壁画の謎を、
私はここで明確に明かにした。

実は私には確証がある！

なぜ私ごときが
『人類の謎』を解き明かすことができたのか、
それは『フリーメイソン』と
ギリシャ神話のヘルメス神に関係がある。

この話をすると、
「宇宙人」が登場してしまうので、
別の機会に話すとしよう。

『聖書』では、
「地球が宇宙の中心」と定める中で、
しかしガリレオ・ガリレイは、
「地球こそ回っている」と真実を語り、
彼は1633年に
「異端審問」で有罪となり、
三百年以上が経過して、
1992年に教皇から、
この判決は誤りと認められ、
名誉が回復された。

フランスを救ったものの、
ジャンヌ・ダルクは1431年、
「宗教裁判」を受けて、
彼女の「神の声を聴いた」
という主張により、
「異端者」として破門にされ、
拷問の後に火あぶりに処された。

彼女は、
25年後の1456年、
裁判により無実が認められ、
破門は取り消され、
火あぶりから約五百年後の
1920年、
ローマ教皇によって
「聖女」に列せられた。

しかしカトリック教会は、
「生まれ変わり」という真理を認めて、
約千五百年の月日が経過した今こそ、
オリゲネスの破門を解くべきだろう。

しかし
オリゲネスの破門を解くことは、
カトリックのみならず、
プロテスタントのみならず、
全人類に大きな波紋となるだろう。

キリスト教の一つの弱点として、
残念ながら一部の人間たちの思惑によって、
「転生輪廻の思想」が
勝手に排除されてしまったわけだが、
実はキリスト教には、
仏教のような
天国や地獄の描写についても、
明確には説かれてはいない。

仏教においては、
様々な地獄が説かれている。

物質的執着から、
吝嗇、ケチ、物惜しみの酷い者が堕ちる地獄、

闘争と破壊に生き、
修羅の如く心を持つ者が堕ちる地獄、

性の道、道徳を踏み外し、
色情に狂った者が堕ちる地獄など・・・、

生きている時の心が天国的であれば、
その者は天国に還っていくが、
しかし生きている時の心が地獄的あれば、
その者は地獄へと落ちていく、
仏教ではそのように説かれているが、

しかしキリスト教では、
「信仰さえあれば天国に生き、
信仰無くば地獄に堕ちていく」
と説いているために、

「イエス以前に生きていた人々、
キリスト教をまったく知らずに生きた人々は、
皆、地獄に堕ちてしまうのか？」
ということが長く議論されてきた。

そこでカトリック教会は、
「天国でも、地獄でもない、
煉獄（れんごく）というところがある」
と、主張し始めた。

キリスト教社会において、
天国地獄の描写を
明確に明らかにしたのは、
「巨大霊能者」と称される
エマヌエル・スウェーデンボルグ
という人物である。

彼はルター派の
敬虔なクリスチャンでありながら、
様々な分野で業績を残している
「超」がつく天才科学者であり、

アメリカのスタンフォード大学で
スウェーデンボルグの知能指数を、
コンピューターで予測してみたところ、
「測定不能」となり、
IQ200以上であったことが、
分かっている。

「信仰」と「科学」は相反するものではなく、
ニュートンのような「超」がつく
天才科学者たちは、
実は「神」や「霊」の存在を信じていた。

私は海辺で遊ぶ少年のようなもの。
時々、普通より美しい貝殻を見つけては、
ただ楽しんでいた。
その間にも、真理という広大な海は、
私の目の前に未発見のまま広がっている。

ニュートンはこう言っていた。

だがスウェーデンボルグが
他の科学者と異なるのは、
彼は五十代にして突如、
霊と会話したり、
霊界探訪(れいかいたんぼう)の記録を書き残したことである。

つまりスウェーデンボルグは、
ダニオン・ブリンクリーのような
臨死体験者とは異なり、
たぐい稀な霊能力によって、
自らの意志で幾度も霊界探訪を行い、
そしてその記録を、
数百冊にもおよぶ書籍として
書き残したわけである。

「そんなまさか！」
と思うかもしれないが、
彼の霊界探訪の書物は、
リンカーン元アメリカ大統領、
思想家で小説家の
ドストエフスキーなどにも
大きな影響を与えた。

そして彼が興した
キリスト教スウェーデンボルグ教会
の中でも、特に有名な方が、
見ること、聞くことができない、
三重苦の奇跡の人ヘレン・ケラーである。

童話『幸せの青い鳥』を書いた
メーテルリンクの夫人は、
「自分は幸せです」と言ってはばからない
ヘレン・ケラーに疑念を抱いていたため、
彼女に会った際に、こう質問したそうだ。

本当に貴女は幸せなんですか？

するとヘレン・ケラーは、
こう答えたという。

はい、幸せです。
もし私が不幸せならば、
私の人生は失敗でした。

もしもそうならば、私は今すぐにでも、
毒を飲むか、ナイフで胸を突きさして、
死ぬべきです。

その力強い言葉を聴いて、
メーテルリンク夫人は、
こう答えたという。

私が間違っていたわ！
幸せの青い鳥を見つけたのは、
まぎれもなく貴女です！

自身のハンデと戦うばかりか、
平和活動にも取り組むことで、
世界中の障害者たちに
愛と勇気を与えたヘレン・ケラーは、
実はスウェーデンボルグの書籍から、
多くの神秘思想を学んだ。

スウェーデンボルグ教会の教えは
私の心臓です。

また彼女はこうも言っている。

私は色の違いが分かります。
私は色には濃淡があることも、
濃淡がどういうことであるかも
分かります。

彼女の書籍『私の宗教』を
紐解くと分かることなのだが、

実はどうやら彼女自身が、
スウェーデンボルグのように、
瞑想中に天国に行って、
天使たちと会っていたようだ。

スウェーデンボルグが語った霊界は、
空の上とか、宇宙など
遥か彼方にあるではない。

死後の世界は存在し、
もともと人間の精神というものは、
霊界と繋がっており、

天使や霊は人間の精神と結びついている。
霊界とは我々の内的世界のことなのだ。

つまり天国地獄は、
心の内にあるということだ。

すなわち、
他の人々の悲しみや涙を見ては、
「助けたい」と想う愛の心は、
天国に近く、

人の悲しみを見ても何も感じず、
自分の利益し考えられない冷たい心は、
地獄に近いということだ。

私たちは
天使や悪魔というと、
頭の上に輪っかがあったり、
角や尻尾が生えている、
自分たちとは隔絶された存在、
と連想しがちだ。

しかしスウェーデンボルグによれば、
真実はそうではないという。

天使も、悪魔も、
かつてこの地上に生きた人間であり、
天上界に還った者であり、
地獄に堕ちた者である。

本漫画ですでに何度も述べているが、
この三次元世界を
包み込んでの戦いに気づくか、
気づかないかにかかわらず、
人は皆、
霊界戦争の真っ最中にいるのだ。

スウェーデンボルグは言う。
霊界では、
自分の内面が世界を作り、
明るい心の人は明るい世界で、
暗い心の人は暗い世界で生きていく。

神への愛、
隣人愛を持つ人は天国へ、
世俗愛、自己愛を持つ人は
地獄へと落ちて行く。

世俗愛とは、
肉体的な愛情、
あるいは利己的な愛情のことで、

隣人愛というのは、
たまたま隣にいる人への
愛ではなくて、
自分が人生で関わり接する
すべての人への愛のことだ。

スウェーデンボルグによれば、
天上界は素晴らしい平和的な世界、
至福の世界であり、
国家や民族や
宗教などにかかわらず
真の善人たちが
愛し合って仲睦まじく
暮らしているという。

一方の地獄界は、
大火事の後のような荒廃した世界、
汚物や排せつ物におおわれた
おぞましい世界であり、
強い悪意を持つ人々が、
岩の穴や谷の裂け目にある
洞窟のような場所を好んで住み、
人々は絶えず口論したり、
互いに暴行を行ったりしている。

スウェーデンボルグは言う。

天使たちは皆、
男性も女性も、
外見は美しく光り輝いている。

しかし地獄の住人たちは、
死人のように生気がなく、
顔は吹き出物などで醜い顔をしており、
体つきはまるで野獣のようであり、

これらの外見的な特徴はすべて、
彼らの生前の心を
ただ反映したものに過ぎない。

つまりいくら生前、
ルッキズムに陥って
外見を美しく着飾ったところで、

もしもその内側の心が醜ければ、
あの世に還った時に、
その外見は醜くなるのだ。

その逆もありえるわけで、
地上ではあまり外見には恵まれずとも、

その心さえ美しければ、
天上界では美しい姿となる、
ということである。

「美」求めるのならば、
この世とあの世を貫いた、
「真なる美」こそを
人間は求めるべきなのだ。

またスウェーデンボルグは
「仕事」についてこうも述べている。
霊界でも人々は働いている。
天上界での仕事というのは、
自分たちが、
心から「やりたい」と想いつつも、
人々の役にも立つ仕事であるために、
働くことがすでに幸福である。
そこに生きがいがあるからだ。
しかし地獄におけるすべての仕事は、
つらい奴隷労働のようなものであり、
仕事からは何の喜びも得られない。
それでも地獄の住人には、
「働かなければ生きてゆけない」
という恐怖心に縛られている。

「天国と地獄における仕事」
ということについて考えてみると、
悪魔勢力の台頭もあってか、
現代の日本および世界は、
デストピア化していることが
よく分かる。

すでにエピソード9で述べたように、
彼ら悪魔教徒たちは、
本気でこの地上世界を、
映画『バットマン』登場する
「ゴッサムシティ」にしたいのだ。

「ゴッサムシティ」とは、
超格差社会による「貧困」、
それに伴う「暴力」などの犯罪がはびこる
「悪徳」の街として描かれているが、

実はアメリカの一部の地域は、
すでにゴッサム化しつつある。

アメリカがイギリスから独立した際、
「独立発祥の地」、
美しき街フィラデルフィアは今、
ゾンビが徘徊する街と化している。
なぜなら貧困化するこの街には、
生活していける仕事がなく、
若者たちは昼間からドラッグを行い、
まるでゾンビのように
街を徘徊しているからだ。

また、アメリカのカリフォルニア州では、
「950ドル（約10万円）未満の
万引きや窃盗は重罪に問わない」
という州法によって万引きが横行している。

そしてトー横キッズを見ても
分かるように
日本も徐々に「貧困化」、

「中道を超えた移民」によって、
ゴッサム化していると言える。

日本の「ゴッサム化」、

それは「悪意」によるものだ。

すなわち本漫画を、
ここまで読んでくれれば、
お分かりのように、

悪魔勢力は増税や物価高、
過剰な移民政策によって、
街を地獄化させ、
我々を貧しくさせており、

「働かなければ生きてゆけない」
という死と貧困の恐怖を、
我々に与え続けているのだ。

エピソード4で紹介したが、
ナポレオン・ヒルが、
『悪魔を出し抜け！』で
明らかにしたように、
悪魔の武器は恐怖であり、
恐怖の中で最も使うのが、
死と貧困である。

だから悪魔教徒たちは、
真理を覆い隠して、
私たちを唯物論に、
閉じ込めたいわけだ。

なぜなら我々人間は、
真理を学んで、
天国と地獄を知り、
転生輪廻を知り、
そしてこれらを貫いている、
「因果の理法」を悟った時、
自らの心の中にある地獄的な部分を、
反省せざるを得なくなるからだ。

人は霊的人生観を築き上げていくと、
過去はすでに過ぎ去れども、
しかし心の過ちは残っているために、
自らの思いと行いを振り返り、
反省せざるを得なくなる。

「真理は汝を自由にする」
イエスの有名な言葉だが、
人は真理の学びを深めると、
不自由な偽物の自分を捨て去り、
自由な本物の自分を見つけ出さずには、
いられなくなるのである。

だから「自分探し」と称して、
世界を旅して回る必要はない。

人は真理を学んで、
真理に基づいて反省することで、
偽我を捨て、真我を見いだせるのだ。

そしてかつての侍たちが
剣道場において、

座禅を行って
心の塵や垢を取り除いていたように、

「偽我を捨て真我を見いだす」、
それこそ真の武士道であり、

そして一人一人の日本人が、
武士道を歩んで、
侍としての真の自己を
発見していく時、

デストピア化した現代社会は、
自然とユートピア化していく。

つまり一人一人の日本人が、
天国的な心を持って生きていくことが、
その人が素晴らしくなるのみならず、
その人が生きている日本と世界も、
より素晴らしくなっていく、
ということである。

悪魔ども、
そして悪魔を崇拝する者たちが、
なにゆえに真理を隠したがるか、
その理由が
ご理解できたのではないだろうか？

近現代研究家の林千勝氏の
『ザ・ロスチャイルド』という書籍によれば、
唯物思想の共産主義を生み出した
カール・マルクスという自称ユダヤ人は、

実は同じく自称ユダヤ人の
ロスチャイルドとは
親戚の間柄であった。

しかもマルクスが崇拝し、
師匠とまで仰いでいた
自称ユダヤ人の詩人ハイネは、
ロスチャイルドの邸宅に
身を寄せていた。

つまりマルクスとロスチャイルドは、
無関係ではなく、
むしろ近く親しい間柄だったのだ。

実はマルクスが世に垂れ流した
唯物的な共産主義というのは、
人々のことを「家畜」と考える、
『タルムード』思想の裏返しなのだ。

「共産主義を実現したら、
必ず軍事独裁国家となり、
自由と民主主義は消えてしまう」

それは共産国家の
中国や北朝鮮を見れば、
すでに明かである。

東大の教授で
日本における共産主義の第一人者に、
丸山眞男という男がいたのだが、
彼は東大の授業で堂々とこう述べていた。

東京大学や京都大学を卒業する
知的エリートたちこそが、
多くの大衆を導いていくべきである。

「エリートによる大衆支配」、
こうした思想は、
実は国際銀行家も、中国共産党も、
まったく同じである。

マルクスが唯物的共産思想を
世界にバラまいた1848年、
天上界の天使や菩薩たちも
この事態を、
黙って見過ごせなかったのだろう。
アメリカの小さな村で
新たな一手を打が打たれた。

それはウソだインチキだと、
散々、いろいろと言われている
「フォックス事件」
というものである。
ハイズヴィルという村に住む
フォックス姉妹は、
夜になると
不思議な物音がすることに気づき、
やがてノック音がしたり、
家具が動いたりするようになった。

初めのうちは姉妹も怖がっていたもののすっかり慣れてしまった娘の1人が、
『お化けさん音を鳴らして』
貴方は人間ですか？
と言うとそれに返してきて、娘たちは面白がって遊び始めた。

DON! DON!
貴方は霊ですか？
「姉妹の質問に、霊がラップ音で答える」というやり取りが始まった。

そして近所の人々を呼び集めて、
大騒ぎになった。

「順番にアルファベットを言って、
霊に望みの箇所で音を鳴らしてもらう」
といったことを繰り返すことで、
やがてその「ラップ現象」は、
言葉のやり取りへと発展していった。

音を鳴らして返事する霊は、こう述べた。

自分は5年前にこの家に泊まった。しかしこの家の住人ジョン・ベルという男に、500ドル奪われて殺されてしまった。

私の名前はチャールズ・ロズマ。

行商人で、私の遺体は地下室に埋められている。

翌日、皆で地下室を掘ったところ
水が出てきてしまったために、
捜索作業は中止になった。

しかし翌年の夏、
水が引いたので
その場所を探して掘ると、
本当に骨と毛髪と歯が出てきた。

ニューヨーク州郊外にある
小さな村で起こったこの霊的事件は、
全米のみならず外国にも伝えられ、
大きな反響を巻き起こした。

「フォックス事件！
幽霊との会話が実現

そのために
「フォックス事件はインチキだ！」
「いや、あの事件はホンモノだ！」
と、全米を超えて世界で議論され、
「スピリチュアルブーム」は、
世界に展開されていった。

つまりこの地球において、
マルクス主義が流行ると同時に、
神秘主義も流行り始めたわけであり、
それはまさに、
天上界と地獄界の攻防と言えるだろう。

当時の神秘主義の中でも、
特に有名な人物として、
推理小説『シャーロック・ホームズ』
を描いたコナン・ドイルがいる。
彼はキリスト教の家庭で
生まれ育つも、
自身が医師であり、
科学に精通していたことから、
「キリスト教は科学に否定的だ」
という理由から、

キリスト教の信仰から遠ざかり、
むしろ唯物論に近づいて、
「反神秘主義者」となっていた。

ちょうどその頃、
彼は、とても仲が良かった、
義理の弟を戦争で亡くして、
酷く落ち込んでいた。

そしてスピリチュアルブームの中で、
彼はとある霊媒師と出会い、

貴方の弟さんが、
こう言っていますよ。

亡くなった弟と自分だけしか
知らないはずの秘密を、
霊媒師の口から聞かされて驚愕し、
こうして彼は、
神秘主義に傾倒していった。

キリスト教最大の迫害者パウロが、
クリスチャンたちを迫害する中で、
イエスの幻影に出会い、目が見えなくなり、
キリスト教の奇跡に触れて、
目から鱗が落ちて、回復し、回心し、
彼自身がクリスチャンとなり、
キリスト教最大の伝道者となったように、

コナン・ドイルも、
「神秘主義最大の迫害者」から、
「神秘主義の最大の伝道者」
になったことから、

私の小説家としての成功は、
スピリチュアルのためにあった！

Spirituality
is
truth

彼は「スピリチュアルのパウロ」
と呼ばれるようになる。

当時のスピリチュアルブームの中でも、
とりわけ有名な人物と言えば、
やはり発明王エジソンである。

すでに述べたように、
超一流の天才科学者たちは、
「霊」や「神」の存在を
信じて疑わなかったのだ。

トーマス・エジソンの
晩年の発明の取り組みは、
「霊界通信機」であり、

彼は本気で、
この三次元以降の高次元世界、
つまり霊界と地上世界の交流を、
科学でもって試みたのである。

残念ながら「霊界通信機」は
成功しなかったが、
努力は無駄にならず、
彼の来世に期待しよう。

さて、「フォックス事件」に話を戻すが、フォックス姉妹は、世の中に翻弄され、

多くの誹謗中傷を受けつつ、いつしかお金もなくなって、次第に酒浸りの毎日を送るようになってしまった。

そして姉妹は40年越しにこう告白した。

自分たちはウソをついて人々を騙してきた。

しかしこの困ったちゃん姉妹は、
さらにその一年後、
こう再告白し直した。

スピリチュアル反対派に
そそのかされて、
1500ドルで買収されて
仕方なくウソをついた。

あの霊的事件は真実だ。
『フォックス事件ウソだった』
という話こそ実はウソだった。

フォックス姉妹の話が、
どこまでが本当で、
どこからが嘘なのかは分からない。

しかし確かにアメリカで始まった
「スピリチュアルブーム」は、
イギリスへと流れついて、
「降霊会」というものが
盛んに行われるようになった。

つまり
キリスト教で言う「精霊」や「天使」、
仏教でいう「菩薩」や「如来」、
神道で言うところ「八百万の神々」、
こうした善き霊、神霊との接触を、
多くの欧米人たちが
試みるようになったのだ。

そしてスピリチュアルの歴史の中でも、
一人の18歳の若者が、
「降霊会」に参加することで、
神秘主義は大きな転換点を迎える。

その人物こそ、
モーリス・バーバネルだ。

彼はひょんなことから、
「降霊界」に参加したのだが、
しかし実は無神論者で、
心の中で密かにこう思っていた。

あの世の霊がこの世の人間に
降りてくるなんて、
そんなバカな話があるものか？

そして彼は、
退屈すぎて眠ってしまった。

ヤバイやばい寝ちゃった！
さすがに失礼だったかな？

目覚めた彼が、
慌てて辺りを見回すと、
周りの参加者たちは皆、
目に涙を浮かべて
彼を見つめていた。

貴方は霊媒として
立派に真理を語っていましたよ。

はっ？
そんなことあるか？
貴方が語っていた真理は、
本当に素晴らしいお話でした。
ぜひ、また「降霊会」に、
ご参加ください。

えっ？
あ、は、はい、
機会があれば、ぜひ・・・。
何を言ってるんだ？
彼には交霊会の参加者たちが
話している意味が、
少しも理解できなかった。

しかし彼はまた、
別の機会に『降霊会』に
参加することになり、
そしてまたもや、
居眠りしてしまった。

私の名前はシルバーバーチ。
私は霊界の中でも
高度な次元に属しているため、
「霊媒に憑依する」
という直接的な接触ができない。

そのために私は今、
霊界において、
レッド・インディアンだった
霊を媒介して、このバーバネルに
憑依して話している。

人々よ、
人生の最高の目的が、
霊性の開発あることを、
忘れてはならない。

それは人生において、
正しい視野と焦点を
持つことを意味する。

愛によって結ばれた仲が
死によって引き裂かれることは決してない。

愛は血縁に勝る。
愛は死を超るのだ。

地上には、
自分を変えようとせずに
世の中を変えようとする
人が多すぎる。

多くの人が
他人を変えようと欲するが、
しかし全ての発展、改革は、
まず自分から始めなくてはならない。

自分が霊的資質を開発、発揮し、
それを何かに役立てられなければ、
他の人のことを改める資格はない。

まずは自分自身が心を入れ替え、改め、
人生観を変えて、魂の奥にある神性を
存分に発揮しなければならない。

「シルバーバーチ」と名乗る霊人が、
インディアンを媒介して、
モーリス・バーバネルを通じて、
地上に言葉を降ろしたわけである。

それはまさに「霊言」であった。

そしてシルバーバーチによると、
彼自身の霊的波長が高く、
モーリス・バーバネルの低い波長とは、
合わないために、

一度、霊界において、
レッド・インディアンという
霊を通信役として媒介させて、
霊言を行っているのだという。

この話を聞いて、
不思議に思われるかもしれないが、
同じようなことを行われたのが、
実はイスラム教を興された
預言者ムハンマドである。

ムハンマドは
神より言葉を預かり
地上に降ろしたわけだが、
霊界において、
大天使ガブリエルが、
通信役を務めることで、
『コーラン』は完成したと
言われている。

また「眠れる預言者」の
エドガー・ケーシーと同様に、
モーリス・バーバネルは、
自分が霊言を行っている際、

完全に意識が飛んでしまって、
自分が何を話しているのか、
まったく憶えていなかった。

しかし幾度とない霊言を繰り返して、
その内容を自身が学んでいくことで、
彼の霊性が開花したこともあって、

晩年期の彼は、
霊界での霊媒を介さず、
シルバーバーチから、
直接、神霊の言葉を
降ろせるようになっている

それは結局において、
「彼が悟り、
彼の波長が高まることで、
シルバーバーチの波長と
彼が通じるようになった」
ということを意味する。

表現を『聖書』的に変えれば、
「彼が霊的修行を積んで、
霊媒師から預言者に成長した」
と言えるだろう。

このように、
唯物的な共産思想が
世界に蔓延していく中で、
スピリチュアルブームも、
世界を席巻していったのであり、
そしてその流れは、
実は日本でも起こっていた。

たとえば当時、
長南年恵という女性が
数々の神秘現象を起こして、
話題になった。

彼女は元から小食であったが、
二十歳頃からは
ほとんど食事を摂らず、
排泄物もほとんど無かったという。

また汗や垢といったものも
ほとんど出ず、
お風呂に入らなくても
髪や体はいつも清潔であった。

彼女の身の周りでは、
不思議な太鼓や笛の
音がすることもあり、

彼女が空気中から
取り出す神水は、
多くの人々の病に効いた。

しかし1895年、
彼女は神水を用いて、
医師の資格なしに
治療を行ったとして、
逮捕されてしまった。

やはり勾留期間中、
彼女は一切食事を摂らず、
一切の排泄物も無く、
入浴が許されていなかったが、
しかし常に髪は清潔を保ち、
体臭も無く、
むしろ良い香りがして、
多くの警察の係官が、
拘留中の彼女の周辺から、
不思議な笛や太鼓の音を
聞いたという。

そして彼女は裁判において、
完全に外部と遮断された部屋に
入れられて、
その密室状態で、
「神水」や「お守り」を
空気中から取り出して、
霊能力を証明してみせた。

彼女は、
裁判官にも霊能力を認めさせて、
無罪判決が下されている。

これは実際に起こった、
「日本の神霊裁判」であった。

共産主義と共に、
唯物主義が世界を席巻していく中、
日本でも「神霊の証明」が、
行われていたわけだ。

すでに述べてきたように、
人は唯物的人生観を持ったり、
これに染め上げられたりすると、
愛の心を見失い、
勇気さえ奮えなくなっていくわけだが、

しかしながら、
あの世の存在を知ったからと言って、
その霊的知識を、
この世からの逃避に使ったり、
単なる霊好き、
ただの神秘好きになって、
この世に積極的な意味を、
見出せなければ、
人生は虚しく儚いものになる。

「あの世があり、
生まれ変わりがある」
ということを知ったからと言って、
虚無主義、
ニヒリズムに陥ってはいけないのだ。

ここで重要なのは、
仏教で言うところの、
「空（くう）の思想」である。

「無」というのは、
「存在しない」
という意味であり、

無

「有」というのは、
「存在している」
という意味であるが、

有

しかし「空」は
どそのちらでもない。

水は冷やすと固い氷となるが、
しかし熱すれば水蒸気となって、
雲になり、いつかは雨となる。
水も、氷も、水蒸気も、
別々のもの見えても、
同じものである。
これと同様に、
私たちも地上では、
肉体という物質に宿っているが、
死を迎えると、
肉体を脱ぎ捨てて、
霊として生きて、
いつか生まれ変わってくる。

我々人間が、
霊として生き続ける以上、
人間の本質は霊であり、

この世は、
あくまでも魂の修行場であり、
いわば「仮の世界」に過ぎない。

天国地獄は、
あの世にのみあるのではなく、

この世における、
私たちの心の中にも、
天国地獄はあるのだ。

それでも我々人間は、
「自分が、自分が」という
自我から生じる「プライド」、
「出身」、「地位や名誉」、
「肩書き」、「財産」、

さらには酒や賭博、
麻薬などの「快楽」、
こうしたこの世的なものに
執われて生きて、
心を曇らせてしまう。

しかしイエスはこう述べた。

幼子の如くあらざれば
天の門は開かん。

つまり人は大人になり、
自我が芽生えさせて、
様々なものに執らわれることで、
いつの間にか心に地獄を作って、
天の門を閉ざしてしまうのだ。

人生を破滅させていくもの、
実はそれは「執着」である。

欲望が悪なのではなく、
「過ぎた欲望」、
「過剰な欲望」、
これこそが悪であり、
これを「執着」と言う。

だからこそ我々人間は、
『人はこの世とあの世を輪廻し、
この世での生き方が、
天国地獄という来世を決めて、
さらには次の転生をも決める』
という真理の観点から、
静かに自らの心を見つめて、
執着を断たんと努力し、
正しく生きていく必要がある。

真なる空とは、
我々がこの世において、
「これこそ自分である」、
「これは自分のものである」、
「これを自分は絶対に手に入れたい」
と執らわれているものは、
実は一切がすべて、
姿形なきものであるのだ、
と悟ることである。

これを「一切皆空（いっさいかいくう）」と言う。

あくまでもこの世は、
魂の修行場、仮の世界であり、
ある意味において、
「この世のすべては、
執われてはならない夢幻である」
と思い切って、
執着を断ち捨ててしまう、

これを「真空無相（しんくうむそう）」と言う。

目に映るこの世の世界、
目に見えるこの世のすべての事象、
これを『色』と言う。

しかし我々は死の下に平等であり、
生けるものは必ずこの世を去り、
目には見えないあの世へと旅立っていく、
すなわち『色即是空』である。

しかしあの世にある魂は、
いつかまた魂修行のために、
再び肉体を持って、
この世に生まれ変わってくる、
存在でもある。

これを『空即是色』という。

多くの仏教僧侶がはき違えているが、
『般若心経（はんやしんぎょう）』にある、
「色即是空 空即是色」とは、
天国地獄、転生輪廻という、
こうした霊的人生観を現したものである。

しかし先ほども述べたように、
「空」の思想をニヒリズム、
虚無主義に使ってはならず、
やはりこの世の人生において、
積極的な意味を見いださねばならない。
なぜなら我々人間には、
一人一人がこの世において、
成さねばならないことが
必ずあるからだ。

これを、
『真空妙有（しんくうむそう）』という。

真に空を悟ったならば、
この世において、
他に代えがたい妙なる成すべきこと、
すなわち『人生の使命』がある、
ということである。

一人一人個性が違うために、
その使命には個性の違いはあれども、
天下国家に対する妙なる使命が、
必ず一人一人には有る。

つまり「一切皆空」、「真空無相」と、
この世における執着を断ちつつも、
「真空妙有」ということを悟り、
この世における己が使命を果たさんとする、
それこそ真の武士道である。

実は現代において、
多くの仏教僧侶たちが、
「空」という言葉の真意を、
大きく誤解しているが、
神儒仏として、
武士道を構成している
仏教の空の思想にこそ、
武士道精神の神髄ある。

はっきり言っておく。

「空の思想」を一切、持たぬ者、
命を惜しみ、名を望み、
官位と金を求む欲深き者なり。
この始末に困らない者は、
真の侍にあらざるなり。

すでに何度も
述べてきたように、
悪魔というのは、
流されない強い人間よりも、
流される弱い人間を好み、
そして「死」や「貧困」
といった恐怖こそを
武器にしている。

だからこそ悪魔と
その崇拝者たちは、
その武器の効果を
最大限に発揮するために、
わざわざ真理を覆い隠して、
「唯物論」こそを、
世界に広めてきたのだ。

そして人間は、
唯物論に染まって、
愛や勇気の心が弱くなると、
どうなるか知っているだろうか？

それは
冷笑家になってしまうのだ。

冷笑家とは、
天下国家に理想を持たず、
熱意を持って行動する人々を
「虚しい」、「無意味」、「無価値」と
冷ややかな態度で見下したり、
上から目線で皮肉ったり、
嘲笑したりする者のことである。

人は唯物論に染まると、
侍のように天下国家に理想を抱けず、
「楽しければいい」と考える快楽主義に走るか、
あるいは
理想を持つ者をあざ笑う冷笑主義に陥るのだ。

だからこそ
エドガー・ケイシーや
スウェーデンボルグなど、
様々な方々が、
一人でも多くの方に、
霊的人生観を持っていただくために、
天国地獄、転生輪廻について、
語ってきたわけである。

こうしたことを考えると、
哲学者プラトンが、
『国家』という政治的な書物の中で、
その一番最後に、
「戦死エルの臨死体験の話」を
乗せた理由がご理解できるだろう。

プラトンは、
「国民一人一人に霊的人生観が無ければ、
国家がより素晴らしくなることはない」、
その真理を伝えたくて、
あえて『国家』という政治的な書物に
臨死体験の話を記されたのだろう。

しかし
ここに一つ大きな問題がある。
それはスウェーデンボルグは、
「天国と地獄はあり、
天使と悪魔も存在し、
彼らは元々は
地上に生きていた人間であった」
と語る一方で、
転生輪廻については語らない。

それはつまり、
「真理」をパズルにたとえるならば、
彼らはそれぞれ異なる
パズルのピースを持ってはいても、
実はパズルの全体像までは
把握し切れていない、
ということである。

真理のパズルの全体像については、
わずか三年間の活動期間で、
十字架にかけられたイエスも
説き切れてはいない。

まずシルバーバーチは、
イエスについてこう述べている。

イエスほど強烈に、
霊性を顕現(けんげん)した者は他にいない。

しかしシルバーバーチは、
「イエスは偉大なる存在」とした上で、
『聖書』について、
こんな手厳しいことを述べている。

聖書は霊的真理と
人間的夾雑物(にんげんてききょうざつぶつ)の混ぜ物である。

これは、本書で、
私が述べてきたことと一致している。

キリスト教には
「贖罪説」というものがあり、
これは
「人は生まれながらにして、
罪を背負った存在であるが、
しかしイエス・キリストが、
十字架で犠牲となり、
人類の罪を贖ってくれたおかげで、
人間はキリスト教を信仰することによって、
その罪は赦される」
というキリスト教の教義である。

この「贖罪の教義」について、
シルバーバーチはこう述べている。

罪を贖うのはあくまでも自分自身であって、
他の誰にも贖うことはできない。
原因と結果の法則を
無視できる者はいないからだ。

またキリスト教では、
「イエスは、
聖母マリアが処女のまま出産した」
と言われているが、
そのことについても、
シルバーバーチはこう述べる。
イエスは大霊の使命を帯びて、
地上に降誕した使者の一人だった。
またイエスは自然法則に則って、
地上に降誕した。
これはつまり、
イエスは処女の聖母が産んだのではなく、
普通の夫婦の営みから生まれつつも、
偉大なる霊的使命を持っていた、
ということである。

しかも本書では、
キリスト教からは偽書とされている、
福音書を引き合いに出して、
「イエスは生まれ変わりに
ついても説いていた」
という話を紹介すると共に、

さらには、
「イエスは結婚しており、
その妻はマグダラのマリアであった」
という話も介した。
これらの話は、
クリスチャンからすれば、
到底、受け入れられないだろう。

なぜならクリスチャンたちは、
「イエスを大宇宙の造物主であり、
その一人子である」
と考えているが、

私が本書で述べていることは、
「イエスは偉大だが人間であった」
ということだからだ。

しかし
ユダヤ教を興されたモーセ、

イスラム教のムハンマド、

儒教の祖の孔子、

さらには仏教を興された仏陀、

彼らは皆、
地上に肉体を持った
人間であった。

そして私も、
シルバーバーチも、
「それはイエスも同じである」
と、語っているわけだ。

『新約聖書』が、
霊的真理と人間的夾雑物の
混ぜ物であるその最大の証拠は、
やはり冒頭で紹介した
「エリ エリ レマ サバクタニ」
という言葉にあるだろう。

そもそもイエス自身が、
十字架にかけられ、
殺されることが
分かっていたのだから、

信仰の人・イエスが、
「我が神、我が神、
なぜ私をお見捨てになったのですか」
などと、軟弱なことを述べたとは、
到底、考えられず、

近くで聴いていた人々が、
「あれはエリヤを呼んでいるのだ」
と、感想を述べているように、
やはり預言者エリヤの精霊を
呼んでいたと考えるべきだ。

預言者モーセは、
大宇宙を創造された造物主を、
「ヤハウェ」とか、「エローヒム」
という名前で呼んでおり、

その同じ存在について、
イエスは「天なる父」と呼んだ。

イスラム教では
「アッラー」と呼ぶが、
これは神の名前ではなく、
アラビア語で
「神」という意味である。

儒教では
その同じ存在のことを
「天帝」と呼び、
古代の中国では
「盤古」と呼んだ。

そして仏教の「法華経」では、
そうした存在について、
「久遠実成の仏陀」と呼んでいる。

イエスと仏陀という
この地球における
二大聖人を比較した時、
実は決定的に異なる点がある。

イエスの教えにおいては、
人間という存在はもろく、
「罪人」のレッテルを貼られるような、
そんなか弱く、儚い存在である。

ゆえに神に祈りを捧げて、
救いを求める「他力信仰」
という面がキリスト教は強い。

しかし仏陀は、
人間を弱者とは見なかった。

「人間はその本質において
強き存在である」
仏陀はそう見たのだ。

過去世からの
業(カルマ)の流れに翻弄され、
運命の波に流されていく、
多くの人々を見てはきたが、

しかし人間とは、
真理を学び、悟りを得て、
自分を造り変えていくことで、
業を克服して、
運命を乗り越えていける、
そうした強き存在であると、
仏陀は見た。

シルバーバーチが、
「神性」という言葉を使ったように、
仏教には「仏性(ぶっしょう)」という言葉がある。

もろもろのすべての
生きとし生けるものは、
『仏と同じ性質』を持った、
尊い存在に他ならず、

人間は真理を学んで悟り、
「仏性」を顕現(けんげん)させていくことで、
誰もが、
より強く勇ましく、
より優しく慈悲深く、
より正しく潔く成長することができて、

仏に近づいていける
尊い素晴らしき存在である、
そのように仏陀は説かれたのだ。

ユダヤ教、キリスト教
イスラム教においては、
「神」と「人間」は
切り離され、
隔絶された存在であるために、
「神性を宿した人間が、
悟りを得て神に近づいていく」
という考え方はない。

しかし仏教においては、
「仏」と「人間」は
完全に切り離された存在ではなく、
「人はその胸の内に、
仏が存在している、
心の中に宇宙がある、
だから人生において、
霊性を開発し、悟りを高め、
仏へと近づいていきなさい」
そう仏教では、
教えられているのだ。

この地球において、
真理を説き尽くされたのは、
まぎれもなく仏陀であった。

しかし
キリスト教の一つの弱点として、
人間たちの思惑によって、
転生輪廻の教えが排除されたり、
元からキリスト教には、
天国地獄の描写が
あまり説かれていないように、

実はある意味において、
仏教にも弱点が存在している。

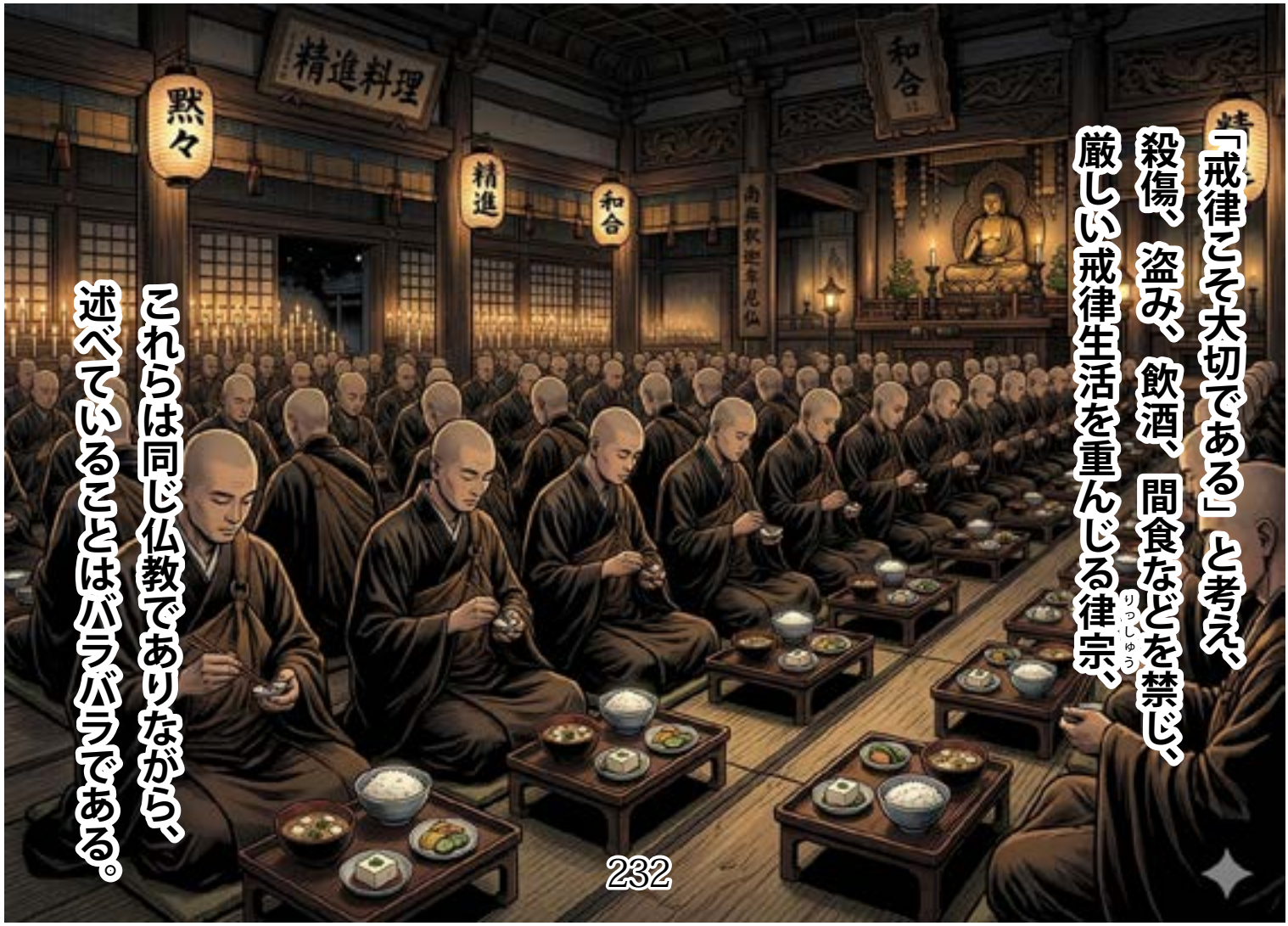
たとえば、
「南無阿弥陀仏」
と、念仏を唱えれば救われる
と説く浄土宗や浄土真宗、

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

「座禅こそ仏教」と考える
禅宗の臨済宗や曹洞宗、

「密教こそ仏教」と考え、
護摩焚きや加持祈禱を行う真言宗、

「戒律こそ大切である」と考え、
殺傷、盗み、飲酒、間食などを禁じ、
厳しい戒律生活を重んじる律宗、



これらは同じ仏教でありながら、
述べていることはバラバラである。

さらに日蓮宗の日蓮は
「法華経こそ大切である」と語りつつ、
しかもこう唱えた。
念仏無間、禅天魔、
真言亡国、律国賊。
つまりこれは、
「念仏宗は無間地獄へ落ち、
禅宗は天魔の振る舞い、
真言宗は国を滅ぼす教えであり、
律宗は国を汚す賊である」
という意味である。

しかもエピソード5で述べたように、
仏教徒の中には
「霊は無い、
だから天国地獄も、
生まれ変わりもない」
という「無霊魂説」を
主張する仏教徒までいれば、

あるいは
「人間は生まれた時から
悟った存在である」
と考える「天台本覚思想」もある。

つまり仏陀こそが、
真理を説き尽くされたのだけれども、

しかし同じ仏教徒なのに、
たくさんの宗派、考え方があり、(v)

また、二千六百年という
長い月日が経過したこともあって、

どれが本当の仏の教えなのか、
分からなくなってしまった、
これが仏教の最大の弱点である。

仏陀は言われた。
私は月を指し示すことはできるが、
しかし月を見る者はそれぞれである。
これは『指月のたとえ』
という話だが、
つまり
「仏陀は真理を説かれるが、
教えを理解して悟りは得られるか、
それとも教えを
理解できず悟れないかは、
人それぞれである」
という意味である。

すなわち仏教のみならず、
キリスト教などでも言えることだが、

「どれだけ師が
素晴らしい教えを弟子に説いても、
心得違いをする者は、
いつの時代であってもいる」
ということである。

そして残念ながら仏教でも、
釈迦没後わずか百年で、
仏陀の教えをはき違える者たちが、
量産されてしまったのだ。

仏教とは、
『自分が、自分が』という自我を
反省によって滅して、
真我を見いだし、
空を悟って仏に近づいていく」、
というところに中心的な教えがある。

そして古代のインドの言葉
（サンスクリット語）で、
「自我」のことを
「アートマン」と言い、
その反対の言葉の「無我」は
「アナートマン」と言う。

しかし厄介なことに、
この「アートマン」という言葉には、
「自我」という意味以外にも、
「霊魂」という意味も持っている。

だからそのために、
「アナートマン」という言葉は、
「無我」のみならず、
「無霊魂」という意味で
受け取ることもできてしまうのだ。

そのために、
仏陀入滅からわずか百年後、
仏教は「上座部仏教」と
「大乗仏教」という二つに、
「根本分裂」をするのだが、

「上座部仏教」は、
「仏教とは霊や魂の存在を認めない
無霊魂説である」
と考えるにいたった。

そして現代の仏教僧侶たちの多くが、
共産思想に毒される
世界の唯物的潮流に流されて、
この「無霊魂説」を取っている。

霊など存在しないのですから、
お葬式や法事というものは、
死者のためではなく、
遺族を慰めるために行うのです。

「霊を認めるか、認めないか」、
これは仏教の根本的問題であり、
天上界と地獄界の戦いを左右する、
地球にとっての重大な問題である。

しかし
『指月のたとえ』にあるように、
「情けないことに、
多くの仏教僧侶たちが、
悪魔に敗れ去った」
というのが現実である。

つまり、
仏陀が説かれる真理の教えを、
『仏法』と言い、
仏法の下に集う僧侶たち集団を
『僧団』と呼び、

そしてこの『僧団』の使命として、
『仏法流布』と『仏法護持』
という二つの重大な使命があるのだが、

「実は仏教は釈迦没後、
わずか百年足らずで
僧団が『仏法護持』の使命を
まっとうできなかった」
というのが真実の歴史なわけである。

仏陀が現れて約千年を、
正しく教えが伝わる
「正法の時代」と言い、

教えはあるものの、

悟りが得られなくなり、

形だけ似ている次の千年を、

「像法の時代」と言い、

教えが失われ、
悟る人がいなくなり、
人道が踏みにじられる時代を
「末法の時代」と言うが、

仏陀入滅後二千六百年、
まぎれもなく現代は、
「末法の世」である。

いくら昔の私が、喧嘩っ早いからといって別に私は、キリスト教徒や仏教徒に喧嘩売ってるつもりはなく、

また私は、悪魔崇拝者をも、回心させたいと願っている。

なぜなら、
あくまでも我々が戦うべきは、
「己心の魔」、
つまり自らの心にある迷い、
あるいは執着や煩悩に
他ならないからだ。

すなわち悪魔は、
「死」や「貧困」など
恐怖を武器にしながら、
結局は、
この世における
「生命」、「金銭」など、
様々な執着から
迷いを生じさせ、
天の門を閉ざすのだ。

だからあくまでも我々の敵は、
「己心の魔」に他ならない。

しかし確かに言えることとして、
悪魔および悪魔勢力が、
日本および世界をゴッサム化する中、
彼らが真理を覆い隠しているわけだが、

このように
キリスト教のみならず、
仏教にも重大な問題があったわけだ。

こうした地上の惨状を、
仏陀やイエスは、
どのようにご覧になるのか？

私は本書の冒頭で、
日本は今、
月日を追うごとに
滅びに向かっており、

しかし日本人の中には、
壊れて崩れゆく日本を
感じながら、
知りながらも、

ただ傍観している人も多く、

それは結局において、
「心」の問題である、

「日本人の心」によって、
日本は繁栄もすれば、
滅亡もする、

そして
人の心はというものは、
成長もすれば、
堕落もするものであり、

人の心を成長させるものとは、
果たして何であるのか？

その本質的な問に答えるのが、
この「エピソードX（テン）」である、
ということを述べた。

人の心を成長させるもの、
それは、
宇宙を貫く永遠にの法則、
「真理」である。

しかし悪魔勢力は、
「真理を覆い隠す」
ということを
重要な戦略にし、

キリスト教の『新約聖書』は、
霊的真理と人間的夾雑物の
混ぜ物となり、

仏教は、「正法の時代」
「像法の時代」を終えて
「末法の時代」
を迎えているわけだ。

「真理が失われている」
だからこそ
日本及び世界が、
混沌としている言える。
しかしイエス言った。
求めよ、さらば与えられん。
尋ねよ、さらば見出さん。
門を叩け、さらば開かれん。
この言葉もまた、
真理である。

だから仏教やキリスト教がどうであれ、
とにかく私たち人間は、
快楽主義に陥ることなく、
冷笑家に堕することなく、
真理を探し求めて、
より優しく、
より逞しく、
より正しく、
成長していかねばならない。
なぜならそれが、
自分自身を幸せにすると同時に、
日本と世界をも、
素晴らしくしていくからだ。

気づくか、
気づかぬかにかかわらず、
こうしている今も、
目に見えない
「霊界戦争」が行われ、

そして悪魔および悪魔教徒どもが、
この地球を支配せんとし、
天使たちも必死に戦っている以上、

我々は真理によって、
自らの神性、仏性を顕現(けんげん)させて、
悪魔勢力に立ち向かうべきなのだ。

なぜなら私たち人間は、
大宇宙に浮かぶ地球に、
まるで風呂場のカビのように、
勝手に生息しているのではなく、
皆が尊い存在だからである。

だから、
「一切皆空」、「真空無相」と、
「この世におけるすべては夢幻である」と、
執着を断ちつつも、

しかし「真空妙有」という
己が使命を見いだし、
その使命を果たさなければならない。

『人生の目的』、
それは自らが
より素晴らしくなっていくことだ。

『人生の使命』、
それは
この世を少しでも素晴らしくすることだ。

こうした『人生の目的と使命』を知り、
快楽に溺れることなく、
冷笑に負けることもなく、

ただひたすらに行動していく、
ここに現代の武士道があると、
言えるだろう。

なお、私は現在、
２１曲ほど作詞し、
ＡＩでメロディを着けた。

これらの歌詞は私の説法であるから、
この曲を繰り返し聴くことは、
私の説法を繰り返し聞いていることにも、
ある意味、等しいと言える。

しかし歌詞が難しいので、
いずれの解説動画も作るが、
歌詞は「真理」そのものではないにしろ、
「真理の縁（よすが）」にはなっているので、

魂を磨いて、悟りを得て、
地獄の門を閉じて、
天の門を開くためにも、
私が作った曲も、
役立てば幸いである。

←与国秀真作詞『BUSHIDO42』全２１曲

漫画寄付金のお願い

皆さまのお力が、この物語を次の章へと導きます。

作品を生み出すということは、時間と覚悟を注ぎ続ける営みです。
真実を描くための資料集め、制作環境――そのすべてを支える力が必要です。
皆さまのご支援が、物語の続きを創造する原動力となります。
政治の真実、武士道精神の目覚めを促す一歩のため、ご支援賜れれば幸いです。

ご寄付の使い道

本作品の制作における主な経費は
以下の通りです。

- 資料購入、漫画素材購入
- 制作環境維持費
  （ソフトウェア、
  各種 AI サブスクリプション、
  機材 等）
- 制作時間の確保
- その他、作品公開のための
  諸経費

❶クレジットカードでのご寄付

https://secure.telecomcredit.co.jp/inetcredit/secure/manual-order.pl?clientip=74164

❷PayPal でのご寄付

https://www.paypal.com/paypalme/bushidoyamato

❸銀行振り込みでのご寄付 下記口座へ、お振込みください 。

●ゆうちょ

記号 00280
番号 105770
名前 シャ）ブシドウ

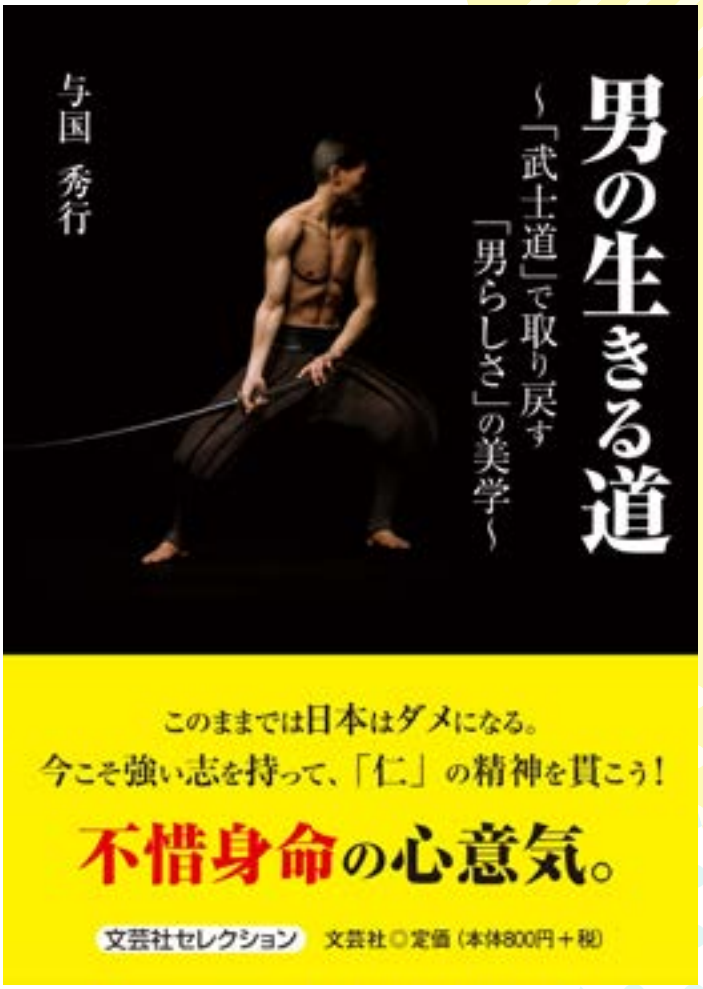
●ゆうちょ銀行

支店名 ゼロニキュウ 〇二九
口座番号 当座 0105770
口座名 シャ）ブシドウ

※ご寄付は任意です。100 円から、お気持ちだけでも十分に励みになります。
※いただいたご支援は制作継続のため大切に活用させていただきます。

Amazon で販売中！

電子書籍 1.500 円



文庫本 880 円

その他にも オーディオブック
『武士道を行く』→

←与国秀真作詞『BUSHIDO42』